OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	助詞「へ」の歴史的研究
Author(s)	黒星, 淑子
Citation	大阪大学, 2026, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105359
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

令和七年度

大阪大学大学院　博士学位申請論文

助詞「へ」の歴史的研究

黒星　淑子

目次

はじめに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
第１部　発話表現における助詞「へ」の用法
第１章　助詞「へ」の上接名詞句について　・・・・・・・・・・・・・・・・・8
－〈人物〉を受ける「へ」についての一考察―
第１節　はじめに
第２節　問題の所在
第３節　先行研究
第４節　調査の手段と方法
第５節　「狂言集」における「へ」と「に」の用法
第６節　〈方所〉から〈人物〉への拡張過程
第７節　まとめと課題
第２章　助詞「へ」の上接名詞句についての一考察　・・・・・・・・・・・・26
－場所から人物への拡張－
第１節　はじめに
第２節　先行研究
第３節　調査方法
第４節　覚一本『平家物語』
第５節　「へ」の通史的用例における建造物接続形
第６節　まとめと考察
第３章　平家物語諸本における助詞「へ」の用法　・・・・・・・・・・・・40
－発話動詞に係る「へ」と「に」の用例を中心として
第１節　はじめに
第２節　先行研究
第３節　調査資料と調査方法
第４節　諸本における「へ」と「に」の用法
第５節　まとめと今後の課題
第２部　移動表現における助詞「へ」の用法
第１章　高野本『平家物語』における「へ」と「に」　・・・・・・・・・・・・55
―「方向」と「帰着点」との関係についての一考察－
第１節　はじめに

目次

第２節　先行研究
第３節　調査の手段と方法
第４節　高野本『平家物語』における「へ」と「に」
第５節　上代～中世における助動詞と表現形式の関係
第６節　まとめと今後の課題
おわりに　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
既発表論文との関係　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
参考文献・参考論文　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・86

凡例

・引用文の漢字の字体は原則として通行の字体に改めるが、一部に記述従うものを含む。
・引用文において一部を省略する部分は「(略)」「(中略)」と表記した。
・テキストの引用部分の記述は、基本的にテキストの記述に従う。
・踊り字「\ / 」「々」は、テキスト、及び引用論文の記述に従う。

はじめに

本論文は、中世期資料を対象として助詞「へ」の発話表現と移動表現における問題を取り上げ、「に」との比較をもとに「へ」の特性について論じるものである。

現代において助詞と認められる「へ」は、奈良時代からその存在が認められるものであるが、それらはいずれも「ゆく」「のぼる」のように、遠く離れた地点へ向かって進んでいく、という意を表す一部の限られた動詞であり、その上接名詞句は比較的広大な場所を示す語に限られていた。それが院政期以降には「向く」「申す」「着く」のような方向や帰着を表わす動詞にも拡張して行く。このような用法拡張の過程において、上接名詞句も広い場所から狭い場所へと範囲が拡大し、一方で「申す」のような発話動詞においては人物を示す語へも用いられるようになる。このように「へ」の方向性への拡張は、新たな用法を獲得することになるが、その反面、これまでに有していた特性を失っていくことになる。これまでの研究では、「へ」本来の特性と拡張後の新たな用法を中心としたものであって、その特性が失われていく過程に目を向けられることは少なく、問題も残されている。特性が失われていくとしても「へ」の本質を捉えるためには、その過程を明らかにすることも必要だと考える。かかる考えのもと、本論文では中世期の資料を対象として、特性の失われていく過程における「へ」の用法について検討して行く。本稿が問題として取り上げるのは以下の点である。

（1）発話表現における上接名詞句に人物を示す語をとる用法について、「に」と異なる「へ」の特徴的用法と、場所を示す語からの変遷

（2）方向性への拡張後における「に」と異なる「へ」の用法と両助詞の関係

上記の問題について、二部に分けて論を進める。

第1部では、発話表現における助詞「へ」の問題を取り上げる。

第1章と第2章では、中世期において新たに認められるようになった「へ」の人物を示す語の用法について、「に」と異なる「へ」の用法について検討する。

「へ」の上接名詞句として人物を示す語をとることが認められているのは室町期であるが、その時代における「へ」の用例を見ると、「へ」の上接名詞句となる人物は身分・地位の高位人物に限られるという現象が見られる。果たしてこの偏りは偶然の結果なのか。偶然ではないとすると、一体どのような背景的要因が右の偏りを生ぜしめたのかが疑問となってくる。

これまでに有していた「へ」の特性に関与するものであるのかなどの疑問について検討する。

第２章において着目するのは、場所性名詞と婉曲表現との関わりである。平安時代以降、係る動詞に発話動詞が加わることによって「へ」の上接名詞句が文脈的には人を表わすようになったのであるが、その場合直ちに場所性が失われて人物そのものを表す名詞句が立つようになった訳ではなく、一時的には場所の一種である建物を表す名詞句が置かれるという現象が見える。このことと関連して、発話動詞の聞き手を表す名詞句における「へ」と「に」の違いにおいて動詞の待遇表現に着目した場合、明らかに「へ」が主語下位待遇の表現に偏るという現象が見えるのであるが、この現象がいかなる理由によるものなのか明らかではない。本章では、場所を示す語から人物を示す語を取るまでの「へ」の通史的過程のもとに、「へ」の特徴的用法と待遇表現との関りを検討する。

第３章では、第２章で取り上げた「へ」の特徴的傾向をもとに、平家物語諸本を対象として調査を行う。平家物語諸本の調査において、注目するのは諸本を通して見た場合の「へ」と「に」の用法の違いである。『平家物語大事典』には、諸本の本文が現存本に至るまでの過程で相互に影響し合い、しかも複雑な過程を辿っていることが記述されている。そこで語り本系における屋代本と覚一本との同一場面の用例を比較すると、異なる点が確認される。例えば、覚一本における「へ」の用例と屋代本を比較したものであるが、ここでは同一か所において共起する動詞が異なることが確認される。その他にも、屋代本では「に」となっているものが、覚一本では「へ」で表される箇所がある。また、屋代本では「殿」接続の名詞句となっているものが、覚一本では場所を示す語となっている用例も確認される。このように上接名詞句、助詞、動詞の三者それぞれの語を比較した場合には、諸本相互に異なる点が認められる。では、助詞「へ」と「に」の用法として見た場合には、どのようになっているのか、という点が疑問となる。この点を明らかにするために、古本系の平家物語諸本を対象として、諸本における「へ」の特徴と「に」との相違点を明らかにすることを目的として調査を進める。

第２部では移動表現における問題を取り上げる。

これまでの研究において、院政期以降の「へ」は平安時代に有していた「に」と異なる特性が失われていき、その反面作用として新たな用法を獲得していくことが説明される。とすると、そのような本来の特性が失われる中で、「へ」と「に」との共存が認められる場合、果たして両助詞に違いがあるのか疑問となる。そこで高野本『平家物語』を観察した場合、命令表現や仮定表現などの一部の表現形式では「に」は確認されず、「へ」の

みで表されるという偏りが見られる。そのような偏りが見られる表見形式における「へ」の用法と、「へ」と「に」が共に同じ表現形式に用いられる用法について、各表現形式における意味内容を中心に「に」との比較調査を行い、「へ」と「に」の関係について検討する。

第１部　発話表現における助詞「へ」の用法

第１部　　発話表現における助詞「へ」の用法

第１章　助詞「へ」の上接名詞句について
－〈人物〉を受ける「へ」についての一考察－

１．はじめに

これまでの研究では、「へ」の中心をなす最も重要な用法は移動動作の目標を示すものであり、移動性をもたない動作の目標や動作の行われる場所を示す用法は例外的存在として処理されるに留まり、その用法について論じられたものは少ない。

本章では、その新たな用法の一つとして「告ぐ」系統の動詞において出現する上接名詞句－人物を示す語－に着目し、「へ」と「に」の違いを調査検討する。場所を示す語から人物を示す語への拡張は、日本語の名詞を考える上で注目すべき点だと考える。それは現代日本語においては、名詞そのものが場所性を有するか否かによって明確な分類があることが明らかにされている。このような分類が古代語においても等しくなされているかについては論じられたものは見られないため、仮定に留まるが、それが古代語においても認められるのであるならば、場所から人物への拡張は名詞の用法上の問題にも繋がるからである。このような考えのもと、本章では、「へ」の上接名詞句として人物を示す用法が認められる資料を対象として、発話動詞と共起する「へ」の用法について、「に」との関係性に目を向けつつ調査を進める。最終的に、「に」と異なる「へ」の特徴的用法を明らかにすることを目指す。

２．問題の所在

現代日本語における助詞「へ」では、「ご両親へプレゼントなさるのですか」「奥様へもよろしくお伝えください」などのように、上接名詞句として人物を示す語を取る用法も見られる。しかし奈良時代において確認される「へ」は、移動を表す動詞と共起するものであり、上接名詞句はすべて方向や場所を示す語であったとされる。それでは人物を示す用法は何時頃から見られるのか。時期の特定は難しいようであるが、『ロドリゲス日本大文典』の「与格の或言ひ方に使い、また誰々に対してといふ別の意味に使ふ。」という記述からすると、室町期には認められていたようである。そして、このような「へ」の用法の拡張について、井上（1968）は「イソポではこんな例を生ずる程、「へ」が「に」

の領域を犯すことが甚しくなっている（pp.349-350）」として、以下のような用例を挙げられている。（以下、井上（同論文））より抜粋した用例を示す。）

《〝「に･へ」両様に用いている〟とされた用例》

（序 1）読誦の人へ対して書す。

（447・19）恩も知らぬ悪人に恩を施さうずる時は、偏に天道へ対して召されい。

（444・12）道理を育てぬ悪人に対しては、善人の道理とその謙りも役に立たず…

《〝「に」で表すべき〟とされた用例》

（431・11）それから一巻の書を作って帝へこれを奉ったれば

（414・12）シャントの言わるるは、「買うてから後に、逃げょうと思うか？何と」と。
イソポが言うは、「我逃げょうと思わうずる時は、御辺へその御意をば得まじい」

特に用例（414・12）については「奴隷として買われるイソポが、「逃げょうと思うような時は、あなた（主人）にそのお許しを得まい。勝手に逃げよう」と言っていると解される。即ち動作の出自が、その客体に依拠する場合に「に」でも表現されるものに該当し、「へ」では無理な表現である（pp.344－355）」と言われたものである。

では何故、このような〝無理な表現〟にまで「へ」が使用されたのか。原因の一つとして、井上（1968）では「当時の日本語の実態がそうなり勝ちな地盤を作っていたいう事と共に、イソポ本文の作者が日本語に十分堪能ではなかったのではないかという事も考慮に入れて置くべきである（p.350）」という事を挙げられた。さらに同じ傾向の用例は『キリシタン教義』にも出自するとして、以下のように述べられている。

（弟子）「何によってか御母サンタマリヤへ対し奉り、百五十遍かのオラショを申上げ奉るぞ」

（師）「六十三遍のオラショは、御母ビルゼンの御齢の数に奉りて申上ぐるなり。今五個条はグロウリアの御理に対して、申し上げ奉るなり。…」

（吉利支丹教義〈p.24～25〉）

これも同趣（筆者注・イソポ「対す」における「へ」「に」両様例を指す。）であるが、弟子の用語より師の方が、正格な表現であることを表すために、意識的に「に・へ」を使いわけたかと思われて興味深い。（p.350）

上記の用例について、「これも同趣（筆者注・イソポ「対す」の〝「に・へ」両様に用いている〟とされた例）であるが、弟子の用語より師の方が、正格な表現であることを表

すために、意識的に、「に・へ」を使いわけたかと思われて興味深い（井上 1968、p.350）。」と述べられている。このように、「へ」と「に」との使い分けが明確になされていないことは指摘されているが、その背景などについては論じられていない。人物を受ける用法は「へ」の新しく獲得した用法であるから、やはり用法拡張の一つとして、上接名詞句に場所を示す語を取る用例と分けて扱うことも必要だと考える。このように考えるのは、先に挙げた二資料の用例では、「へ」の上接名詞句となる人物には身分上の偏りともとれる傾向が見られるからである。

《「へ」助詞》　〔対す〕‥‥‥読誦の人、サンタマリヤ
　　〔無理な表現〕‥‥‥帝王，御辺
《「に」助詞》　〔対す〕‥‥‥悪人

上記における「へ」の上接名詞句では、その身分・地位が比較的高位な人物であり、明らかに低位な人物は含まれない。「帝王」は最高の地位を表す語であり、「御母サンタマリヤ」「御辺」敬称「御」を接続する。「読誦の人」としても著者から見た場合には優遇すべき人物と解することもできる。ただ一例のみではあるが、「に」での「悪人」と比較するとより際立った特徴として捉えられる。果たしてこの偏りは偶然の結果なのか。もし、偶然ではないとすると，どのような背景的要因が右の偏りを生ぜしめたのかが疑問となってくる。

上記の疑問を問題として、本稿では中世期以降の資料を中心として，非移動性動詞－「告げる」系－に対して使用された「へ」の上接名詞句を人物に限定した上で、調査・検討する。なお目的が「へ」の上接名詞句として出現する人物の身分的偏りを検証することにあるため、たとえ「告げる」系であっても受け手との上下関係を明確に把握し難い動詞－「説明する」「乞う」等－は対象外とする。（以下、上接名詞句として出現した人物を示す語は上接名詞句〈人物〉と記述する。）

３．先行研究

「へ」の通史的拡張過程については、石垣（1955）、青木（1956）、此島（1966）によって多くの点が明らかにされている。

石垣（1955）では、現代において助詞として認められる「へ」に近い用法を有する「へ」は上代から存在するが、その共起する動詞はすべて経由性を伴う移動性動作を表わす動詞に限られていることを発見する。その上で「へ」と共起する動詞について、上代から室町期までの通史的拡張過程を明らかにされた。その中で、発話動詞をとるようになるのは院政期以降「へ」が移動性を伴う動詞から移動性をもっていない動詞を伴うことに

よって純粋な方向性への用法拡張を説明されるのであるが、その方向性への拡張が結実したとして挙げられるのが「申す」であった。

この論をうけ、青木（1956）では「に」との関係性を含めた上での「へ」の通史的口調過程を論じられている。その中で、室町時代は「申す」「仰す」「訴ふ」などの発話動詞が増加し、それらの動詞が目標を示している具体例として、天草版平家物語の「申す仰す」「云ふ」等の動詞が挙げられている。

此島（1966）では、移動性をもたない動詞「告ぐ」の用例が、石垣（1955）で示された鎌倉期以前の平安末の更級日記に現れることが示される。そして「へ」と共起する移動動詞と上接名詞句の拡張ついて、石垣（1955）、青木（1956）を総合的に纏めて記述されるが、その中で「室町時代の口語的文献では、「へ」の用法は現代語と同様に広くなっている」として、ロドリゲス『日本大文典』における「与格の或言ひ方に使ひ、また誰々に対してといふ別の意味に使ふ。（五五〇ぺ）（石垣（同論文）p.96）」を挙げるとともに、上接名詞句の人物を示す語の出現を示される。

井上（1968）においては、既に述べたように「に」で表わすべきものと思われる用例が伊曾保物語や天草版平家物語に多く見られると指摘される。

４．　調査の手段と方法

調査は、共起する動詞を発話動詞、上接名詞句は人物を示す語として、「へ」と「に」の比較を中心に行う。それは、「に」では人物を示す語を受ける用法も確認されるのに対し、「へ」では場所名詞から人名詞へと拡張する過程をもつ。このような違いがある反面そこに「へ」と「に」の共存した状況も見られるからである。

4.1. 用例の抽出と方法

調査資料は、主に『大蔵虎明能狂言集翻刻註解』（上巻・下巻）である。（以下より「狂言集」と記述する。）その理由は、「へ」の上接名詞句として、人物を示す語が出現したとされる室町時代の資料であり、話し手と受け手の関係を把握することが可能であり、調査可能な分量が得られると考えたためである。覚一本『平家物語』、『延慶本平家物語』を除く他の資料には新編日本古典文学全集（小学館）所収の資料とする。『延慶本平家物語』には『延慶本平家物語本文篇上・下』（1990）、覚一本『平家物語』は日本古典文学大系所収の覚一本『平家物語』（1985−1986）とする。

「狂言集」における用例の抽出は国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（CHJ）により、語彙素読み「へ」、条件の追加「品詞－中分類－格助詞」として検索し、その中で発話動詞を選択する。選択した各動詞を対象として、前方共起条件を語彙素読み「ニ」、条件の追加「品詞－中分類－格助詞」（１～５）として行う。他の資料では「へ」を同様に

検索する。

4.2. 分類の基準

発話動詞としての判別は、基本的に『日本古典対照分類語彙表』(2024)における言語活動動詞の範疇とする。

「狂言集」の調査には、人称の別に用例を見て行く。それは、人称詞の使われ方は「自分や相手の捉え方、人間関係に対する認識のあり方が反映している(『日本文法大事典』p.470)。」ものであり、ことに「日本語の人称詞は「話し手が誰に向かって話しているか、誰について話しているかにより、話し手自身の捉え方、聞き手の捉え方、それ以外の捉え方が変わる(p.471)。」とされていることからも、話し手と上接名詞句〈人物〉の上下関係を捉えるためには有益だと考えたためである。〔対称〕における高位人物としての判別は、山崎(1963)における「室町時代待遇表現体系」に基づき行う。そこでは対称の主体待遇表現の対応関係を 5 つの語群に分類し、各段階の接辞が示されている。そこで示された敬語表現おける 5 分類と接辞を以下に示す。(以下、「対称の主体待遇表現対応表」(p.709)より一部を抜粋して示す。)

【第1段階】〔代名詞〕こなた・こなた様　［接辞］様　お・御―様　殿

【第 2 段階】［代名詞］そなた・　［接辞］殿

【第 3 段階】［代名詞］わごりょ・おぬし・あれに［接辞］呼称の人名

【第4段階】［代名詞］汝・そち・われ　［接辞］呼称の人名・呼称の人名＝め

その他については、文脈に示された地位・身分、および話し手との関係により判断する。

用例の提示において、話し手と上接名詞句との関係を捉えられる用例は、両者の関係を矢印(→)によって示す。用例の所在はカッコ内に演目名・類・頁数を示す。他の資料は資料名・頁数、上巻と下巻がある場合には、上・下の別を記述する。『天草版伊曾保物語』『天草版平家物語』には頁数の下に行数を示す。

構成は以下の通りである。次節の第５節では、『狂言集』の「へ」と「に」について、人称別に「へ」と「に」の比較を行い、「へ」と「に」の相違点について検討する。第６節では、平安期から室町期までの「へ」の通史的拡張過程を調査し、その過程における方向や場所を示す語から人物を示す語への変化と、その背景について検討する。第７節にてまとめと今後の課題を述べる。

５.「狂言集」における「へ」と「に」の用法

5.1.〔他称〕に表わされた「へ」と「に」

上接名詞句〈人物〉には〔他称〕〔対称〕〔自称〕の三形式の用例が確認されるが、以下よりは〔他称〕から順に検証して行く。

まず「狂言集」に表わされた「へ」と「に」の用例を纏めた表[注1]を挙げる。

表１　〔他称〕における「へ」と「に」

助詞	「へ」	「に」
地位・役職	目代殿２・上頭・お上人２・上人・閻魔王２	御出家・あれなる御僧・あの僧・亭主２
親族	むこ殿・親子衆	ちちご・ととさま・ととさまかかさま おぢや人
人名		平六・菊一・太郎冠者
その他	皆々・方々	女・人・はじめたる人・たのふだ人４ たのふだる人２・ぬす人２・そのつんぼ うちの者ども・あれ６
合計	12	33

上表の用例を見ると、「へ」と「に」とでは異なる傾向が見て取れる。「へ」には「殿」待遇の人物、代官（目代殿）や地頭（上頭）などの役職にある人物が表される。一方「に」ではそのような役につく人物は含まれず、盗人、個人名や親族名などの限定されない広範囲な身分の人物が示される。そこに王や役職名などの高位となる人物は含まない。また、「ととさま」「ちちご」などの親族を表す名詞句以外には、師弟関係や主従関係の人物が表されており、その上下関係は、主人から仕える者への発話や師匠から弟子に対する発話など、上位者から下位者へと捉えられる関係が見られる。

Ⅰ．地位･役職を表す「へ」と「に」

「へ」では、「殿」、「お」の接辞を伴う役職目や、最高の地位を示す「帝王」などが表される。「に」において「御」を伴う「御出家」「あれなる御僧」が確認される。「御出家」は、遠国から都に来た修行僧である。「あれなる御僧」も通りすがりの修行僧に対する発話に表わされたものである。これは「へ」が地位・役職にある人物であることと比較すると、高位とは言い難い。

《「へ」の用例》

(1) りふじんな事をしたらは、目代殿へいふて、成敗をさせまらせうぞ
〔金藤左衛門→女〕（きん藤左衛門、集狂言之類 339）

(2) 上人へは身共が申さう　〔何某→新発意〕（とびこゑ、出家座頭類 204）

《「に」の用例》

(3)（所の者）「御はらだち尤じや、御出家に申事こそあれ、ことに申やうがわるひ
〔所の者二→出家〕（腹不立、出家座頭類 160）

(4)（蛸の精）「なふ＼／あれなる御僧に申べき事の候
〔蛸の精→出家〕（たこ、出家座頭類 251）

Ⅱ　人名･その他に表わされる「に」

人名やその他にいおいて、複数以外の用例は、「に」のみで表される。これらの用例にいては、話し手との関係を見ると、亭主や主人から、使われる者への発話と使われる者から主人を表す場合がある。

以下(5)の用例は、主人から召し使う者として紹介される冠者（聾）に対しての発話であるが、以下の用例は、主人が聾に対して菊一を雇うことを話した後の会話となっている。(6) の用例は、夫から出家への発話の中に表わされたもので、妻を表す。

《「に」の上接名詞句〈人物〉と話し手》

(5)（主）「やいつんぼ、きくいちもゐる程に（中略）又、ミた事があらハきくいちにいゑ〔主→冠者（聾)〕（きかず座頭、」出家座頭類 280）

(6)（夫）「只今も申ことく、内々おもひよりて御ざるにより、不断女にも申て御ざれハ、一段よからふと申た程に〔夫→出家〕（女＝妻）（路れん、出家座頭類 191）

(7)（太郎冠者）急で罷帰、たのふだる人に申さう〔太郎冠者独白〕（たのふだ人＝主）（かねのね、鬼類小名類 581）

(8)（太郎冠者）「いや参る程に是でござる、ていしゆにその由申さう〔太郎冠者独白〕（たのふだ人＝亭主）（はぎ大名、大名狂言類、315）

以上、〔他称〕において、「へ」では上接名詞句〈人物〉の身分が低い場合、もしくは話し手との関係が近しい場合に表わされるものは見られないが、「に」では高位・高官の人物以外の、広範囲な身分の人物を表わす場合に表わされる。その中には主人から仕える者を指すものと仕える者が主人を指す場合とのいずれの場合も見られる。ただ、「に」の用例に仕える者が主人を指し示す（(7)、(8)）の用例は対面した状況ではない、という事が関与するのではないかとも考えるが、この点については明らかにすることは出来なかった。

5.2.〔対称〕〔自称〕に表わされた「へ」と「に」

次に〔対称〕〔自称〕用例を挙げる。用例の横に用例数を示す。

表２　〔対称〕における「へ」と「に」

助詞	「へ」	「に」
代名詞	こなた２・そなた４	こなた・そなた２ そち・わごりょ・汝２
その他		汝がやうなる若ひ者
合計	6	8

表３　〔自称〕におけるへ」と「に」

「へ」	「に」
こなた５・こち	私４・愚僧・身共６ 某・わらは・それがし
	我等両人・両人
6	16

5.2.1　〔対称〕に表わされた「へ」と「に」

〔対称〕では、「へ」は代名詞のみで表されるが、これらを待遇表現の対応表における「へ」と「に」を照らし合わせると、「へ」は第一段階と第二段階に表わされるが、一方「に」では第一段階から第四段階までのいずれにも表される、という段階の違いが見られる。

「へ」で表された用例は、男から仲人への発話や太郎冠者から主人を示す用例に表わされる。使われる者（太郎冠者）からの発話は、主人より低い身分と認識したものと捉えられる。しかし、仲人への発話の場合は身分的格差のない同等の身分である。しかし、この男は、以前に仲人に世話になったことが説明されており、その関係製からすると世話になった相手に敬意を以て話したと捉えられる。

《〔対称〕に表わされた「へ」》

(9)「それに付けてこなたへ申たひ事があつてまいつた｛男→仲人｝（いハはし、女狂言之類 15）

(10)「一へん言ひて　申こなたへ申たひ事がござる〔太郎冠者→主人〕（つりばり、女狂言之類 8）

上記例の「へ」の用例では、話し手と上接名詞句〈人物〉の関係は、身分的に低位から高位として捉えられる。

《〔対称〕に表わされた「に」》

(11) ちとそなたに無心をいひたひが、きひておくりやらふか

〔大名→昆布売り〕（こぶうり、大名狂言類 304）

(12)「そちにむしんをいひたひ事が有が、きひておくりやらふか

〔大名一→通行人〕（ふたり大名、大名狂言類 299）

一方の「に」では大名から町人への発話が表される。これらの用例では、身分的格差があり、高位から低位への発話として捉えられる。

以上により、〔対称〕において、下位者に対しては「に」が表されるが、「へ」の使用は含まない。この点は、〔他称〕での用例に違うものではないと言えるようである。

5.2.2.〔自称〕に表わされた「へ」と「に」

〔自称〕において、注目されるのは、自ら謙った表現として捉えられる「愚僧」が、「に」で表されるという点である。一方「へ」では、目代に対する発話が多く確認される。これらは商人動詞の争いごとについて、自身の正当性を訴える場面となっている。

(13) では馬博労と牛博労の争い事を目代に訴える場面であり、(14) では浅鍋売りと

鞁鼓鞨鼓売りの争い事を目代に訴える場面となっている。

《〔自称〕に表わされた「に」》

（13）あそこな者がまいつて、結句私にのけと申程に、それを申あがつての事で御ざる　〔馬博労→目代〕（牛馬、脇狂言之類 124

（14）其間にあそこな者が、それがしがうしろへ参て、けつく私にたてと申を　〔浅鍋売→目代〕（なべやつばち、脇狂言之類 132）

一方「へ」では亭主や舅から従者の太郎冠者への発話に表わされる。（15）では、舅が太郎冠者への命令であり、（16）では亭主（勾頭）から太郎冠者への命令が示される。

《〔自称〕に表わされた「へ」》

（15）又むこ殿の御ざつたらハ、こなたへ申せ〔舅→太郎冠者〕（鶏聟、聟類山伏類 353）

（16）おの＼／御ざつたらハこなたへ申せ〔勾頭（亭主）→太郎冠者〕（まりざとう、出家座頭類 276）

このような話し手と上接名詞句〈人物〉との関係を考えるならば、「に」では自らを謙った表現に用いられるが、「へ」は上位者が自らを高位との認識を以て発話する場合は「へ」が表される、という「へ」と「に」の異なる傾向として捉えられる。

以上、「狂言集」における「へ」と「に」について述べたことはいかのようになる。

1、〔他称〕の上接名詞句〈人物〉は，話手から見て身分的に隔たりのある上位人物に表わされる。「に」では高位の役職にある人物にを除き、個人名や親族語を含む広範囲な地位、身分の人物が表される。

2、{対称}において、「へ」では話し手より高位の地位・身分の人物を示す場合に表わされる。「に」では上接名詞句〈人物〉より高位の地位・身分にある人物からの発話に表わされる。

3、〔自称〕では、身分・地位が高位である者が自身を示す場合には「へ」が表される。「に」では自らを謙った表現や、自身が低位であることが明らかな関係において表わされる。

「狂言集」における「へ」用例の調査・検討を行ったが、概ね同様の傾向が確認でいた。それは「へ」の上接名詞句〈人物〉が話し手より地位・身分が高位であり、話し手との親密度が低い場合に表わされる。一方「に」では、上接名詞句〈人物〉が話し手より地位・身分が低い人物で、話し手との関係に隔たりがある場合に表わされる、という

ものである。

このような「へ」と「に」の異なる傾向は、先に述べたキリシタン資料において指摘された偏りに繋がるものとも捉えられるものであり，キリシタン資料での偏りは偶然の結果としては扱えないことになる。そして，もし上記の特徴的傾向が認められるのであれば､次に問題となるのがその背景的要因である｡次節ではその点について検討したい。

6.〈方所〉から〈人物〉への拡張過程

まず方所のみを受けた「へ」が人物を受けるに至るまでの過程を見たいと思う｡但し、ここで述べるのは共起する動詞を「告げる」系に限定しての調査結果である。それは非移動性動詞に対する初期例として挙げられたのが､「告げる」系の動詞であったためである。

Ⅰ平安期

「へ」助詞が受ける語に人物をとるようになるのは平安期資料における『更級日記』の方所を指す用例が指摘されている。

(17)「中堂より御香賜はりぬ。とくかしこへ告げよといふ人あるに、うち驚きたれば、夢なりけりと思ふに、よきことならむと思ひて、おこなひ明かす。

（更級日記 340）

Ⅱ院政期以降

初期のものとして『宇治拾遺物語』の用例が指摘されている。ここで出現する語は方所の意味も持つが、また同時に人物としても理解可能な語である。

(18)「我が心一つにてはかなはじ。この由を院へ申してこそは」といひければ…

（宇治拾遺物語 392）

それが『延慶本平家物語』に至っては、人物と方所との両方の意を持つ語に加え「法皇」のように人物のみを指す語の用例も出現しており､用例数も増加傾向を見せている。

【申す】＝法皇／女院（2）／院（4）／大臣殿（2）／宇佐宮／鎌倉殿
普賢寺殿／関白殿
【仰合す】＝近衛殿下

ところで上記の「へ」用例文を見ると、顕著にみられる表現として使者の介在表現が挙げられる。人物と方所との両方で解される語では約半数に、そして人物を指すと捉えられる語の（近衛殿下・法皇）においても一例には使者の介在が想定される。
（以下、『延慶本平家物語』の用例を挙げる。）

《明らかに使者の関与が認められる用例》

（19）此次第ヲ鎌倉殿へ申サデハイカヾ」トテ、使ヲ急マヒラセケリ（下 544）
（20）大納言「和気清麻呂ヲ御使トシテ、宇佐宮へ申サセ給タリケルガ（下 100）
（21）兵衛佐ヨリ院へ被申ケル状云 （下 359）
（22）法皇思食煩セ給テ、大蔵卿泰経經朝臣ヲ以テ近衛殿下へ被仰合ス。（下 476）
（23）院ヨリ右少弁定長ヲ御使ニテ、右大臣殿摂録の事、頼朝興猶取申之由、近衛院普賢寺殿へ申サセ給ヒタリケレバ、忽ニ門サシニケリ（下 505）

このように「へ」の用例文に使者表現が関わってくるのは何故なのか。これについては「へ」の受ける語が、本来は方所であったことから考えると当然の結果とも受け取れる。例えば上接名詞句が方所の意として用いられた「院」であったとしても、最終的には「申す」目標に設定されるのは院内に存在する人物である。とすると、そこには「院」外から「院」内へ発せられた「伝達者（使者）」によって間接的に「申す」状況が想定される。それは使者の介在表現に関わらず把握できるものであろう。そこで想起されるのが「へ」の得質として挙げられた「甲地点から乙地点へ進み近づく」という要素である。使者による伝達は「甲地点から乙地点へ進み近づく」状況に相当するとしても矛楯は生じないのではないか。ところが人物を受ける用例では様相が異なってくる。使者表現のない場合には直接的行為として解することも可能となり、よって「進み近づく」意との関与について言及は難しくなるからである。

これまで、動詞「申す」には「へ」本来の特質「甲地点から乙地点へ進み近づく」となる要素（筆者注：石垣氏の言われる「経由性」）は見ることができないとして、「院へ申す」等の用例は「この場合の「へ」は單に「申す」對手に對する方向性のみを表はしてゐるといふべきである（石垣（1955、pp.69-70））とされている。しかしながら使者による伝達表現が「甲地点から乙地点へ進み近づく」に通ずるものと考えるならば、「方向性」のみとして扱えるのは上接名詞句が人物であり、しかも「進み近づく」意に関わる表現がない用例に限られることになるであろう。

そのように見ると、人物を指す用例のうち「使者」に関わる表現が見出せない用例が「純粋な方向性」ゆえの表現として扱えるものとなるようである。

つまり、「へ」の受ける語は平安期の「漠然とした〈方所〉から、中世期には「〈人物〉〈方所〉いずれにも解される語」、役職・地位により〈人物〉のみを指す語」という流れ

を辿ってきたことになる。この過程を「へ」の要素との関連から見ると、「具体的な使者表現があるもの」から「具体的表現はないが状況により隔たり、および使者介在が想定されるもの」というものとしても捉えることも可能ではないかと考える。「進み近づく」意の関わりが確認できない用例については「方向性」の獲得として見たものである。

覚一本『平家物語』では、動詞の類が増加傾向を示す。「へ」使用が認められたのは「訴う」「尋ね申す」「伺い申す」「申す」「奏聞す」「仰す」「仰合す」「宣ふ」以上の語である。うち受ける語が人物と考えられる用例として、以下の用例が挙げられる。

【申す】＝殿下／小松殿／鳥羽殿／法皇／八条女院／大納言佐殿／鎌倉殿
【申上ぐ】＝大臣殿　【伺申す】＝法皇
【仰す】＝小松殿　【仰合す】＝其時の殿下法性寺
【宣ふ】＝平家の君達のかたがた

ところで、たとえ「告げる」動詞が移動性を持たないとしても、それが全て「方向性」の用例として扱えないことについては先述した通りである。このような観点からして、上接名詞句〈人物〉の用例においては、使者表現を伴う用例を除いた上でなければ「純粋な方向性」を言及することも、また更には上接名詞句〈人物〉が高位である点との関与についても言及することはできないことになるであろう。従って、上記用例については先ず使者表現の有無を確認する。そこでもし使者表現（及び関連表現）があれば、それは「甲地点から乙地点へ進み近づく」意との関与による「へ」の用例と見做したい。そして関連表現の見られない用例に限り「方向性」を認めると共に、優遇的意識との関与の可能性を探るものである。

使者の介在が明らかに表現されたものは次の用例である。

(24) 鎌倉殿へ飛脚をも（ッ）て合戦の次第をしるし申されけるに
〔義経→鎌倉殿〕（下 172）

(25) 入道相国のおとゝ池の中納言頼盛卿をも（ッ）て八条女院へ申されけるは･･･
〔入道相国→八条女院〕（上 320）

(26) 入道相国福原の別業におはしけるが、越中守盛俊を使者にて小松殿へ仰せられけるは･･･････
〔入道相国→小松殿〕（上 242）

(27) 大臣殿は安芸右馬助能行を使者で、平家の君達のかた＼／へ、「･･･（略）」との給ひければ･･･････
〔大臣殿→平家の君達の方々〕（下 195）

次の用例に使者の明示はない。しかし「御詞にて」とあるのが第三者による伝達表現

として捉えることができる。

（28）私のふみはゆるされねば、人々のもとへも詞にて事づけ給ふ。北方大納言へも御詞にて申されけり　〔重衡→北方大納言佐殿〕（下 243）

直接的な使者表現が認められないものは，残りの七例である。

⒜「自今以後も、汝等能々心うべし。あやま（ッ）て殿下へ無礼の由を申さばやとこそおもへ」　〔重衡→殿下〕（摂政関白基房）〕　（上 118）
⒝「さらば宗盛、其様をやがて今夜鳥羽殿へ申せかし」
〔（高倉上皇→）宗盛→鳥羽殿〕　（上 272）
⒞齋藤別当あざわらって、「･･･大臣殿へも此やうを申あげて候ぞ」といひければ、
〔齋藤別当→大臣殿〕　（下 76）
⒟出家の志の候よし、便に付て小松殿へ申されければ･･････
〔新大納言成親→小松殿〕　（上 187）
⒠大納言になしかへさるべきよし、法皇へ申されけり〔兵衛佐→法皇〕　（下 289）
⒡此由法皇へ伺申して御免ありけり〔小松殿→法皇〕（上 187 上）
⒢「……、めしつかはるべし」と、其時の殿下、法性寺殿へ仰合られければ、御領あまたたびな（ン）どしてめしつかはれける程に〔近衛天皇→其時の殿下〕（上 420）

しかし、たとえ使者に関わる表現のないものであっても、為手と受手との隔たりが否定できない用例については「甲地点から乙地点へ進み近づく」意との関連を疑うべきとも考えた。とすると、会話文⒜・⒝・⒞では受ける語〈人物〉が発話者とは離れた位置に存在していることが明らかであるため「進み近づく」意を否定することはできなくなる。⒟〔新大納言成親→小松殿〕では「便り」を「書状」と解釈するならば、受け手との隔たりや使者の介在は当然のものとなろう。

ただ、⒠〔兵衛佐殿→法皇〕⒡〔小松殿→法皇〕⒢〔近衛天皇→殿下〕三例のみが「進み近づく」相当表現の認められないものとして残される。⒜「なしかへさるべき由」⒡「此由」という詞が使者による伝達内容を示すものかもしれないが、この点による判断は難しい。というのは、「に」使用においても以下のように「此よし」を伴う用例は存在するからである。

（29）頼盛卿、力及ばでこのよしを入道相国に申されけり　（上 320）
（30）（後白河法皇）其夜の酒宴に、此由を浄憲法印に仰あはせられければ
（上 124）

覚一本『平家物語』では「進み近づく」要素の見出せない人物の用例としては⑹・⑴・⑹の四例が残されたわけで、これらは「純粋な方向性」ゆえの用例として扱えるものとなる。そしてこの用例の上接名詞句〈人物〉に目を向けると,「法皇」(⑹・⑴・⑹)「殿下」(⑹) となっており, いずれも最高位に位置する人物にかぎられていたことが確認されるのである。

とすると, やはり「進み近づく」表現のないものを「方向性」だけで捉えることに対しては疑問が残る。これまで「進み近づく」要素との関連は「に」と異なる「へ」の特質として捉えてきた。ところが, 以下に示すように、この点の欠如した「へ」用法は「に」用法との境界も曖昧になるわけで、そこには「へ」用例としての存在価値を見出すことも難しくなるからである。

(前出) ⑹大納言になしかへさるべきよし法皇へ申されけり
(前出) (29) 頼盛卿、力及ばでこのよしを入道相国に申されけり
(前出) ⑹・「・・・めいつかはるべし」と其時の殿下、法性寺殿へ仰合られければ、
御領あまたたびなんどしてめしつかはれける程に
(31) 法皇「此條頼朝がかへりきかん事いかゞあるべからむ」とて、諸卿に仰合られければ (下 390)

そして、キリシタン資料では先述したように〝「へ」では無理な表現〟とされるほどの用例も指摘される。
『天草版伊曽保物語』において「進み近づく」表現の見られない「へ」の用例は「申す」一例挙げられる。それは為手 (狐) と受手 (驢馬) とが対面しての発話であり、両者間に隔たりはなく、しかも受ける語〈人物〉は、優遇的意義を含めた語として捉えられる。

(32)「いかに優れて気高い装いなるお方へ申さうずる事がある. そなたのお声をばやがて承り知った」と言うて・・・ (479㉙)

他の「へ」の使用された用例は「奏す」一例「言ふ」一例。「奏す」は, 書簡による間接的な伝達状況が描かれたもの。「言う」用例で, 為手と受手との上下関係を見ることは難しい。「逃げて去ぬる」ことからして、そこに隔たった状況があったことも推測されるが、この点については明確に述べることはできない。

(33) (エンノ) 謀を為いて謀書を作り、「イソポこの頃野心を企て他国へ移り、この国を傾けょうと仕つる」と国王へ奏した (433⑦)

（34）狼は即ち逃げて去ぬるが、立ち帰って野牛へ言うは‥‥‥　　（482①）

『天草版平家物語』では人物として個人名も出現する。

【申す】＝関白殿／重盛（2 例）／女院　　【奏聞す】＝院

当資料は，覚一本『平家物語』との違いという点でも興味深いものであるが、助詞の違いが見られたのは以下二例である。天草版では「へ」で出現するが，覚一本では「に」が使用されており，当然そこに「進み近づく」意との関連表現を見ることができない。

（『天草版平家物語』の所在をカッコ内に頁数・行数を示す。）

《『天草版平家物語』》

⒜　少将の舅の宰相殿このことを伝え聞いて、重盛え申されたわ：中宮御産のをん祈りさまざまにござるとも（略）と申されたれば　　（71⑦）

《覚一本『平家物語』》

⒜⇒　門脇宰相か様の事共傅へきいて、小松殿に申されけるは「中宮御産の御祈りさま＼／に候也。‥‥‥」　　（上 211）

《『天草版平家物語』》

⒝　宗盛も大きに喜んで、この由を女院え申されたれば、女院もを手を合わさせられて、喜ばせられ　　（139⑩）

《覚一本『平家物語』》

⒝⇒　宗盛卿此よしを八条女院に申されければ、女院「なにのやうもあるべからず。只とう＼／」とて‥‥　　（上 321）

とすると、『天草版平家物語』では「へ」の使用された用例の特徴として「進み近づく」的要素との関連を挙げることは出来ないことになる。他なる特徴を探すとして「に」用例文との比較を試みても，そこに違いを見出すことは難しいようであった。

《『天草版平家物語』「に」用例》

（35）季貞帰り参って、このよしを宰相に申したれば：まことに本意なさうにして重ねて申さるるは、　　（39⑥）

（36）宗盛この宮を人目見奉って、父の清・に申されたわ、先の世に何たる契りがござるか、（略）と、申されたれば　　（138㉔）

そこで上接名詞句〈人物〉を見るならば、『天草版平家物語』では〔関白殿〕〔重盛〕〔女院〕、『伊曽保物語』では〔御方〕である。これらは遡って『延慶本平家物語』の〔法皇〕、そして「覚一本」の〔法皇〕〔殿下〕と共に、いずれも高位人物という点で共通している。一方「に」の上接名詞句〈人物〉に目を向けても、「へ」の用例ほどの高位人物は認められない。

《覚一本『平家物語』「に」の上接名詞句〈人物〉》

【申す】･･･入道殿／入道相国／宰相／小松殿／八条女院／八嶋の人々
判官／二人の女房共／鎌倉殿／母上
【奏す】･･･君
【仰す】･･･飛騨守景家筑後守貞能／郡司維季／侍共／武士
有験の高僧貴僧／山の座主寺の長吏／藏人大夫頼兼浄憲法印
成親以下近習の人々／諸公／侍一人
大政大臣左右大臣内大臣堀川大納言
【のたまふ】･･･侍共／明雲大僧正／土肥次郎／当国の軍兵共／守護の武士
大佛聖俊乗房／乳母の女房／北条四郎時政

《『天草版平家物語』「に」の上接名詞句〈人物〉》

【申す】･･･頼朝／清盛／父の清／義経／北の方／大将軍宰相
六代御前／宗盛

結局、『延慶本平家物語』から『天草版平家物語』までの「進み近づく」的要素の認められない「へ」用例においては、上接名詞句〈人物〉の特徴として「狂言集」同様に身分・地位等が高位である点を挙げることができる。これまで「甲地点から乙地点へと進み近づく」意を以て説明できない「へ」用例については「純粋な方向性」ゆえとされてきた。しかしながら、今回の調査結果が認められるとするならば、これらの「へ」用例については「方向性」だけではなく、上接名詞句〈人物〉を直接的に指す行為を避けた結果として「方向性」を持つ「へ」が優遇的意義と関わって使用されていたのだと仮定することも可能となるのではないだろうか。

7．まとめと課題

本稿では「告ぐ」系動詞に対して使用された「へ」が受ける語として人物を取る用例について調査、検討してきた。その結果は次のように纏めることができる。

「告げる」系動詞に対して使用された「へ」は，受ける語として漠然とした方所を取

る用例が平安期より見られる。このような方所の場合には、方所内に存在する受手への隔たりは当然として捉えることができるため、用法拡大においては「甲地点から乙地点へ進み近づく」要素との繋がりを考えたものである。

中世期には人物と方所とのいずれにも使用される語、役職を指す語、その後に人物のみを指す語の用例も出現するようになる。これらの多くにも隔たりに通ずる表現が認められた。

上記により、「へ」の上接名詞句は「漠然とした〈方所〉」から「〈人物〉〈方所〉いずれにも用いられる語」、そして「個人としての〈人物〉名」という流れを辿ってきたことが伺える。この変遷過程には、「具体的な使者・隔たり表現があるもの」から「具体的な表現はないが状況により隔たりが判断されるもの」、更には「隔たりの要素が認められないもの（方向性）」への変化という様に、「へ」が意識的制約を次第に少なくして来た過程としても捉えることができる。

そして、隔たりの要素が見出せない用例には、上接名詞句〈人物〉が高位であるという共通点が認められた。よって、この用法は「へ」の「方向性」と、上接名詞句〈人物〉に対する優遇的意義の関与の結果ではないかと考えたのである。

一面からすると，受手が高位であるという点は、上接名詞句が「〈人物〉〈方所〉いずれにも解釈可能な語」からの拡張用法であることにも通じるのかとも考えられる。方所を以て人物を指すものは高位人物を指す語に限られているからである。しかしながら、上接名詞句〈人物〉に対する優遇的意義の関与を考えるに当たっては、「言語主体より遠く離れた所を漠然と指す」という「へ」の要素は「方向性」と、上位待遇人物に対しては直接的行為を避ける―優遇的要素―とが関与した結果だとしても矛盾はないのではないだろうか。

もし右の特徴が認められるならば、それは「へ」の用法拡大といかに関わるのか。その用法全体からの位置付け等についてはさらに調査が必要である。この点について、次章にて検討する。

［注］

（１）以下に、「へ」と「に」の用例の内訳を纏めた表を挙げる。

表３　「狂言集」における「へ」と「に」の用例

	他称		対称		自称	
	「へ」	「に」	「へ」	「に」	「へ」	「に」
申す	お上人２ 上人 むこ殿 閻魔王２ 方々 皆々	平六 女 たのふだ人３ たのふだる人 はじめたる人 あれなる御僧 御出家 亭主２ ちちご あれ３	こなた２ そなた	こなた そなた	こなた４	私４ 愚僧 身共
申し付ける		人				
仰せる	親子衆	人			こなた	
仰せ付ける		武家 余人				某 我等両人 両人
言う	目代殿２ 上頭	菊一 太郎冠者 そのつんぼ ぬす人２ あの僧 とととさま とととさまかかさま おぢや人２ あれ３ うちの者ども	そなた３	そなた そち わごりょ	こち	それがし わらは 身共５
言い付ける				汝２ わかひ者		
合計	12	33	6	8	6	16

第２章　助詞「へ」の上接名詞句についての一考察
―　場所から人物への拡張　―

１．はじめに

現代日本語における「へ」は、その目標対象には「京都へ行く」「友人へ知らせる」などのように、場所を示す語と人物を示す語とのいずれもとることができる。ところが奈良時代ではその上接名詞句に人物を示す語を取る用例は確認されないなど、時代によって異なる点が認められる。しかし、これまでの通史的研究は係る動詞を中心としたもので、上接名詞句については明らかにされていない問題も残されている。

本稿でことに着目したいのは、場所性名詞と婉曲表現との関わりである。平安時代以降、係る動詞に発話動詞が加わることによって「へ」の上接名詞句が文脈的には人を表すようになったのであるが、その場合直ちに場所性が失われて人物そのものを表す名詞句が立つようになった訳ではなく、一時的には場所の一種である建物を表す名詞句が置かれるという現象が見える。このことと関連して、発話動詞の聞き手を表す名詞句における「へ」と「に」の違いで係る動詞の待遇表現に着目した場合、明らかに「へ」が主語下位待遇の表現に偏るという現象が見えるのであるが、この現象がいかなる理由によるものなのか、未だ明らかではない。本稿では、人物を示す語を取るまでの「へ」の通史的過程を明らかにすることを目的として上接名詞句と係る動詞との関係に目を向けつつ調査を行い、待遇表現との関与について考察する。

２．先行研究

「へ」の通史的拡張過程については、石垣謙二（1955）、青木伶子（1956）、此島正年（1966）の研究によって明らかにされている。人物を示す語を中心として論じたものは、キリシタン資料を対象とした白井純（1997）、天草版平家物語における「へ」と「に」について論じた江口正弘（2000）（2003）が挙げられる。中世期の和文資料を対象とした黒星淑子（1997）では、「へ」の係る動詞が発話動詞の場合、上接名詞句が人物を示す語を取るものは高位人物に限られることを指摘し、「へ」と待遇表現との関係を推測する。しかし、そこに場所を示す語からの拡張過程や場所を示す語との関係など通史的観点にお

ける記述は見られない。

本稿は覚一本平家物語を用いて、「へ」が人物を示す語を取るに至るまでの通史的拡張過程を明らかにし、「へ」と待遇表現との関係について記述することを目的とする。同資料は黒星淑子（1997）も対象資料に加えているが、本稿ではそこで言及がない点を含めた上で調査を行う。

その手順は以下の様に行う。

・発話動詞を取る「へ」と「に」の比較調査を行い、「に」とは異なる「へ」の特徴的傾向を明らかにする。
・「へ」が人物を示す語を取るに至るまでの通史的拡張過程を辿る。
・建造物を示す語と敬称として認められる語との関係を検討する。

3．調査方法

調査は「へ」と「に」との対比を中心に行う。それは「に」では始めから人物を示す名詞句を受ける用法が確立されていたのに対し、「へ」は場所名詞から人名詞へと拡張する過程をもつ。このような違いがある反面、そこには「へ」と「に」の共存状況も見られる。共存する両者の比較調査を行うことは「へ」の用法を明らかにする上で有益だと考えたためである。

3.1. 用例の抽出

調査資料は、主に日本古典文学大系所収の覚一本平家物語（1985−1986、第 27 刷）である。その理由は、「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への過渡期にあたる鎌倉期の資料であり、登場人物の身分・地位の記述もあるため為手と受け手の上下関係も把握しやすいと考えられたためである。ことに覚一本は鎌倉期の語り系諸本とされる中でも受け手への会話表現を多く含むものであったため、人物を示す語を上接名詞句とした格助詞が表れやすく、調査可能な分量が得られると考えたためである。

検索には金田一春彦・清水功・近藤政美編『平家物語総索引』（1973）を使用した。発話動詞は「へ」の係る動詞として出現した動詞のみとした。発話動詞としての判別は基本的に『日本古典対照分類語彙表』（2014）における言語活動動詞の範疇とする。通史的調査[注1]には国立国語研究所『日本語歴史コーパス』（CHJ）を用いる。検索対象は奈良時代編 - 万葉集、平安時代編 - 仮名文学（古今和歌集を除く）、鎌倉時代編 - 説話・随筆、日記・紀行とする。係る動詞に複合形をとる用例は対象外とする。それは複合形動詞の場合、動詞の意義を明確に把握することは難しいと判断したためである。平家物語を除き、萬葉集及び平安時代資料と鎌倉時代資料は、新編日本古典文学全集（小学館）所収の各資料とする。

3.2. 分類の基準と結果

平家物語の調査に先立ち、以下 3 点の分類と判別を行う。

a. 上接名詞句における分類　―場所を示す語と人物を示す語―

b. 係る動詞（発話動詞）における分類　　―尊敬語と謙譲語―

c. 身分・地位における基準　―高位人物としての判別基準―

3.2.1. a 上接名詞句

覚一本平家物語では「へ」の上接名詞句として「小松殿」「宮の御方」等の様に人物と場所とのいずれにも用いられる語が存在する。そのような語の分類は以下の基準により行う。（用例の所在は覚一本平家物語では上冊・下冊の区別とページ数、他の資料では資料名とページ数をカッコ内に示す。）

a-1 人物を示す語としての分類基準

・人に対して行われる動作･行為を表す動詞や発話動詞を取る用例。

・主従関係や親族関係など、人間関係を示す用例。

a-2 場所を示す語としての分類基準

・係る動詞として「行く」「帰る」のような移動動詞、及び存在動詞を取る用例の上接名詞句。

更に、上記の分類によって得られた結果が異例ではないことを確認すべく全体における出現率の調査を行う。解釈は日本古典文学大系平家物語における頭注に従うが、一部には参考として注釈書を用いる。通史的資料の解釈は新編日本古典文学全集の各資料中の解釈及び頭注に従うものとする。

平家物語にて抽出・分類した語について、人物を示す語として用いられた用例数と全用例中の出現率を調査した結果は以下の通りである。

表 1　覚一本平家物語における「殿」「御方」「女院」「宮」「殿」の分類

	人物	建造物	方向	計
御方	21　(87%)	1	2	24
女院	57　(100%)	0	0	57
宮	72　(86%)	11	0	83
殿	29　(100%)	0	0	29
殿(接尾語)	611　(87%)	84	0	695

表の説明：「人物」は人物を示す語、「建物」は建造物を示す語、「方向」は方向を示す語を指す。カッコ内は人物として用いられた用例の出現率（小数点第三位以下切捨て）を表わす。

3.2.2. b 係る動詞

係る動詞（発話動詞）は尊敬語と謙譲語との 2 分類とする。

【謙譲語】申す　申し上ぐ　申し合はす　申し置く　伺ひ申す　奏聞す
奏す／【尊敬語】仰す　仰せ合はす　仰せ付く　宣ふ　宣ひ合はす

3.2.3. c 身分・地位の高低の判別と待遇表現との関り

高位人物としての判断基準

人物の身分・地位が高位であるか否かの判別は、西田直敏（1978）と西田 直敏（1990）に基づき行う。それは両書が本調査と同じテキスト（日本古典文学大系『平家物語』）を用いたものであることによる。西田直敏（1978、pp.186−233）では平家物語における敬語表現の様相、西田直敏（1990、pp.288−299）では平家物語における敬語として詞・辞の分類の許に「尊敬表現」「謙譲表現」「自敬表現」について論じられている。そこで示された敬語表現におけるよる三分類と敬語を以下に示す。（第三グループは敬語が用いられない人物を対象としたものであるため省略した。）

【第一グループ】

〈貴族社会の支　配者層〉天皇・院（上皇・法皇）・女院・后・宮など
皇族と摂政・関白

【第二グループ】

大臣と大納言・中納言・言参議および三位以上の貴族

〈代名詞〉君　殿　貴殿　御方　御房　御辺　わ殿

〈敬称の接尾語〉君　公　殿　卿　御前　御方　御房

〈複数の接尾語〉たち（尊敬）

４．覚一本『平家物語』

4.1.「へ」と「に」の相違点

4.1.1. 概観

発話動詞を取る用例を対象として「へ」と「に」の比較を行った場合、その上接名詞句と係る動詞に異なる点が認められる。以下に挙げた表は、その違いを数値的に纏めたものである。

表 2　上接名詞句

助詞	場所を示す語	人物を示す語	
		建造物 接続	建造物 非‣接続
へ	17	14	2
に	1	12	59

表 3　発話動詞

	尊敬語	謙譲語
へ	4	29
に	43	29

表 2 は「へ」と「に」の上接名詞句を人物と場所とに分け、更に人物を示す語を建造物の接続した名詞句と接続のないものとに分けた数値を「建造物接続」と「建造物　非・接続」として示したものである。（以下、「建造物接続形」は、「殿」など建造物を接続した形を指すものとする。）

表によると、「へ」は場所を示す語と人物を示す語とのいずれにも偏りなく用いられるが、人物を示す語の場合には建造物の接続形へ偏る傾向にあることが分かる。表 3 は係る動詞を尊敬語と謙譲語とに分類した用例数となるが、ここでは「へ」が謙譲語に偏る傾向が見て取れる。このように数値的に偏りが見られた用例を問題点として捉え、次節より考察を進めていく。

調査対象としての問題点

・「へ」は場所を示す語と人物を示す語とのいずれにも偏りなく用いられる。
・上接名詞句において人物を示す語の場合、「へ」では建造物を接続した名詞句への偏りが認められる。
・係る動詞を尊敬語と謙譲語とに分類した場合、「へ」では謙譲語への偏りが見られる。

4.1.2. 場所を示す語

まず、場所を示す語として分類した上接名詞句を以下に挙げる。

「へ」の上接名詞句 ： 都　大宰府　関東　鎌倉　福原　内裏　院御所
衆徒の御中　平大納言のもと
「に」の上接名詞句：　安芸の厳島

係る動詞が発話動詞であることから考えると、上接名詞句には受け手としての人物が想定される。ところが「に」の用例では具体例を見ても人物に繋がる表現を確認することはできない。（漢字表記は可能な範囲で常用漢字に改めて記す。）

(1) 入道相国夫婦共に、「あはれ、いかにもして皇子御誕生あれかし。位につけ奉り、外祖父、外祖母とあふがれん」とぞねがはれける。わがあがめ奉る安芸の厳島に申さんとて、月まうでを始て、祈り申されければ、中宮やがて御懐妊あ （ッ）て、思ひのごとく皇子にてましましけるこそ目出たけれ。(上 223)

上記のように具体例をみると、「に」の用例で表されるのは入道相国夫婦の土地信仰であり、祈り申す対象は「安芸の厳島」という場所そのものとなっていることが分かる。ところが「へ」の用例では土地信仰のような表現は見出せず、いずれにおいても受け手

として人物を想定することが可能な用例となっている。それは、文脈において発話後に人物の反応や周囲の状況が記述されていることからも判断される。以下は全用例を纏めたものとなる。

表 4　上接名詞句として場所を示す語を取る用例　発話後の状況

	上接名詞句	反応行動の主体人物	発話後の状況と反応行動	用例所在
「に」	安芸の厳島	――	――	上223
「へ」	衆徒の御中	神人宮司	しばらくゆらへたり	上135
	衆徒の御中	大衆	谷々へおり、坊々へぞ入にけり	上138
	都	前右大将宗盛卿	大にさはいで、入道相国おりふし福原におはしけるに此よし申されたりければ	上284
	福原	わかき公卿殿上人	「あはれ、とく事のいでこよかし。打手にむかはう」なんどいふ	上344
	都	平家の人々	大にさはがれけり	上426
	都	大臣以下残り留まり給ふ一門の人々	いさみ悦事なのめならず	下97
	大宰府	平大納言時忠卿	惟村にいでむかってのたまひける	下132
	関東	兵衛佐	大におどろき	下161
	都	鼓判官	陳ぜんとて夜を昼に次いで馳下る	下161
	院御所	かたはらの公卿殿上人つぼねの女房達	「…是らをあんだけられんはくちをしかるべし」と面々に申されければ	下184
	平大納言の許	平大納言時忠卿始めとして平家一門の公卿殿上人	寄り合ひ給ひて、御請文のおもむき僉議せらる	下249
	院の御所	院中の上下	騒動す	下343
	院の御所		「只法にまかせて追出せよ」と宣旨下さる	上122
	都		やがて打手を指し遣はす	上424
	院の御所		「頼朝に見せて後こそ…」と仰せければ	下254
	関東		「何さまにも見参してこそともかうもはからはめ」との給ひければ	下416
	鎌倉		「何さまにも見参してこそともかうもはからはめ」との給ひければ	下416

用例の具体例（一部）に発話後の状況を示した部分に波線を臥して示す。

(2) 此由都へ申たりければ、大臣殿以下残りとゞまり給ふ一門の人々いさみ悦事なのめならず。　(下 67)

(3) 大臣殿・平大納言のもとへは院宣のおもむきを申給ふ。…（中略）…さる程に、平大納言時忠卿をはじめとして、平家一門の公卿殿上人よりあ　ひ給ひて、御請文のおもむき僉議せらる。　(下 249)

(4) 此由を社家より内裏へ奏聞しければ、「只法にまかせて追出せよ」と宣旨を下さる。　(上 122)

(5) 兵衛佐大におどろき、「（略）知康においては既に違勅の者なり。めしつかはせ給はば、かさねて御大事いでき候なむず」と、宮こへ早馬をも（ッ）て申されければ、鼓判官陳ぜんとて、夜を日についで馳下る。　(下 161)

(5) は、知康の所業を知った兵衛佐が「知康をお召し使いになっておられると、重ねて

一大事が出来いたすことになろう」と「都」へ申し送り、それを知った知康が自身の弁明のために関東へ馳せ下る場面である。ここで「申す」後の反応として表現されたのは、受け手によるものではなく、話題の当事者である知康自身の「夜を日についで馳せ下る」という行動である。しかし後の状況として「後には稲荷の辺なる所に、命ばかりいきてすごしけるとぞ聞こえし。」と、知康は人目を避けて稲荷の辺りに住んだことが記述される。これにより (5) 「都へ申す」は、都に在住する法皇や貴族に向けた発話表現として捉えた。他の用例は、全て表に示した通り上接名詞句の場所と関係する人物の反応が表される。このことを考え合わせると、受け手として人物が想定される場合、上接名詞句として場所を示す語を取る用例は「へ」の一特徴として捉えられる。

4.1.3. 人物を示す語

「へ」の用例において人物を示す語と判断したものは以下の名詞句である。

【人物を示す語と判断した「へ」の全用例】

法皇　殿下　大臣殿　小松殿　鳥羽殿　大納言佐殿　法性寺殿
鎌倉殿　宮の御方　其御方　平家　公家　平家の君達のかたがた

用例を通覧して、まず気付くのは人の名前など直接人物を指し示す語が確認されないという点である。表 3 に示したように、「へ」では人物を示す語に分類した名詞句 16 例中、14 例（約 87.5%）が建造物を示す語の接続形を取る。建造物の接続が無い用例であっても、「へ」では直接的に人物を指し示す名詞句は見られない。

(6)出家の志の候よし、便に付て小松殿へ申されければ、此由法皇へ伺申て御免ありけり。　(上 187)
(7) 荘園私領一所も相違あるべからず、并に大納言になしかへさるべきよし、法皇へ申されけり。　(下 289)

一方「に」では、建造物の接続を取る名詞句は全 71 例中の 12 例（約 16.9%）に止まる。また、建造物の接続がない名詞句には個人氏名や「人」を接続した用例が含まれる。

(8) 土のすこしたかき所に少将袖かきあはせ、いきたる人に物を申やうに、泣く々申されけるは　(上 228)
(9) 鎌倉殿より頻に申されければ、安判官資兼に仰て召捕（ッ）て関東へぞ下されける。　(下 422)

上記のように具体例を見ると、名詞句そのものにも違いが認められる。この違いを見ても「へ」の建造物接続形への偏りは注目すべき点だと考える。

4.1.4. 係る動詞

係る動詞において「へ」では謙譲語への偏りが見られることは既に表 3 に示した通りであるが、更に少数の尊敬語に目を向けると、「へ」と「に」とでは上接名詞句において違いが認められるのである。上接名詞句に限って見るならば、「へ」では建造物と方向を示す語の接続形に限られており、そこに摂政・関白より低位は含まない。

(10) 建礼門院のいまだ中宮にて在ましける時なり。其御方へ、「さ様のいろしたる御衣や候」と仰ければ (上 391)
(11) 其時の殿下、法性寺殿へ仰合られければ、御領あまたたびな（ン）どして、めしつかはれける程に (上 420)

ところが一方の尊敬語をとる「に」の用例では、建造物の接続形は見られず、個人名や役職名などの広い範囲の人物を指し示す名詞句を取る。中にはいやしめの接尾語「ども」を伴う用例も含まれる。

(12) 此事、新大納言成親卿已下近習の人々に仰合られて、山せめらるべしと聞えしかば (上 150)
(13) 太政入道、瀬尾太郎兼康に仰て、備中国へぞ下されける。(上 184)

以上、数値比をもとに「へ」の上接名詞句と係る動詞における具体例を検討してきた。結果として上接名詞句における建造物の接続形を取るか否かという点において違いがあることが明らかになった。とすると次に疑問となるのが、この違いが果たして有意差として認められるのかという点である。そこでこの点を明らかにすべく検定[注2]を試みたところ、建造物の接続と非接続の違いにおいて有意差が認められた（$P<0.01$） 。よって「へ」の用例における建造物接続形への偏りと謙譲語へ偏りは，「に」との相違点として等しく有意差が認められるものとして考える。

では、ここで得られた結果は先行研究における指摘と如何に関わるのか。次節ではこの点を併せて検討する。

4.2. 待遇表現との関与

本節では、発話動詞が用いられた「へ」の受け手人物は高位人物限定であるとの指摘について検討する。まず発話動詞を取る全用例を以下に挙げる。

表　5　覚一本平家物語における「へ」と「に」の上接名詞句（人物を示す語）

「へ」	《地位･役職･身分》（全16例）　法皇2　殿下　大臣殿　北大納言佐殿　法性寺殿 鳥羽殿　鎌倉殿　小松殿2　八条女院　宮の御方　其御方　平家の君達の方々 平家　公家
「に」	《地位･役職･身分》（全50例）入道殿　小松殿　大臣殿2　鎌倉殿2　三位殿　女院　八条女院 九郎御曹司2　公家　入道相国2　宰相2　判官　平大納言　大将　座主　祇園別当　浄憲法印 仏所の法印　李広と云将軍　山の座主･寺の長吏　明雲大僧正　高僧貴僧2　大進僧正覚宗 太政大臣・左右の大臣・内大臣・堀河大納言忠親卿　諸卿　大仏の聖俊乗坊　山門の大衆2 君　母上3　乳母の女房2　二人の女房　武士2　守護の武士2　侍共3　東国の軍兵ども 《役職+人名》（全6例）権大僧都澄憲　飛騨守景家・築後守貞能　権少輔頼春　左少弁兼光 小胡麻郡司繊維　岡辺権守泰綱 《人名》（全7例）中原範貞　土肥次郎　瀬尾太郎兼康　安判官資兼　伊豆蔵人大夫頼兼 北條　木曽 《その他》（全8例）侍一人　一定仕らんずる仁　他人　近習人々　才人等　人々2　いきたる人

表を通覧すると明らかなように「へ」では平氏や源氏以上の高い地位にある人物に限られるが、「に」では皇族から官位のない兵士に至るまでの広範囲の人物となっており制限は見られない。それは複数を示す用例にも同様の傾向が窺える。平氏一族を示す「平家の君達」は「へ」を取り、地位のない東国武士である「東国の軍兵」は「に」を取る用例として出現するのである。

(14) 大臣殿は安芸右馬助能行を使者で、平家の君達のかた〴〵へ、「九郎義経こそ（略）」との給ひければ、みな辞し申されけり。　(下 195)

(15) 判官宿所に帰（ッ）て、東国の軍兵どもにの給ひけるは、「義経、鎌倉殿の御代官として（中略）これよりかへらるべし」　(下 302)

このように身分・地位の観点からすると、「へ」の受け手人物が高位の人物に限られるという特徴的傾向は否定されないことになり、建造物接続形と高位人物との関係が疑問となる。そこで改めて上記の人物を高位人物として判断した基準そのものに目を向けるならば、高位人物とした判断の基準と建造物接続形とには一つの共通点があることに気づく。高位人物としての判断は先行研究によるが、そこで挙げられた最高位の人物と敬称の殆どに建造物や方向を示す語が確認されるのである。

覚一本平家物語において確認された最高位人物を表わす語と敬称

【最高位の人物】　天皇・院（上皇・法皇）　女院　后　宮

【敬称】　殿下　－公　－卿　－殿　－御前　－御房　－御方

平安時代[注3]では「殿」や「君」が敬称の接尾辞として使用されていたことは既に明ら

かにされているが、その段階では実名敬避の用法として住居名など様々な間接的な婉曲の呼称が発達したということである。とすると次に疑問となるのが、建造物を示す語と敬称との関係である。よって次節では「へ」の上接名詞句を中心とした通史的拡張過程を辿り、その上で建造物を示す語の位置づけを試みる。

5.「へ」の通史的用例における建造物接続形

平安時代編の検索対象は竹取物語、伊勢物語、土佐日記、平中物語、蜻蛉日記、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、堤中納言物語、更級日記、大鏡、讃岐典侍日記とした。そのうち「殿」「宮」「院」等の建造物を接続する名詞句の用例数は以下のようになる。

表 6　平安時代資料における「へ」の上接名詞句と係る動詞の分類

係る動詞	発話動詞		移動動詞・存在動詞		対象用例
上接名詞句	建造物	非･建造物	建造物	非･建造物	
竹取物語	0	0	1	9	10
伊勢物語	0	0	1	21	22
蜻蛉日記	0	0	2	37	39
落窪物語	1	0	4	10	15
枕草子	0	0	0	44	46
源氏物語	0	0	21	70	91
和泉式部日記	0	0	1	10	11
堤中納言物語	0	0	1	20	21
更級日記	0	1	0	9	10
大鏡	0	0	2	29	31

表の説明：上接名詞句の「建造物」は「殿・宮・院」、それ以外を「非・建造物」とする。係る動詞の「移動動詞・存在動詞」には「発話動詞」以外を含める。表 7 も同様の形式をとる。

上記の結果をもとに、**Ⅰ　発話動詞の出現以前，Ⅱ　発話動詞の出現以降、Ⅲ　人物を示す語の出現**、の三期に分けて辿っていく。

5.1.　Ⅰ　発話動詞の出現以前

奈良時代の資料に確認された「へ」では、係る動詞は「行く」「帰る」などのような移動動詞であり、その上接名詞句は国名や地名を示す語[注4]である。

(16) あさもよし紀伊へ行く君が真土山越ゆらむ今日そ雨な降りそね(1680)
朝裳吉　木方往君我　真土山　越濫今日曾　雨莫零根(萬葉集 394)

萬葉集における「へ」の係る動詞（カッコ内に歌番号を記す。）

行く（280）（800）1214）（1680）（1827）（2130）（3321）（3447）（4435）
遣る（3363）（4240）（4422）（4428）／上る（886）（944）（4472）
越ゆ（954）（2128）（3230）／帰る（3696）／います（3587）／ます（3996）
鳴き渡る（271）

それが平安時代には、移動動詞と存在動詞をとる用例として建造物を示す語が確認される。発話動詞の出現以前としては、以下の用例が挙げられる。

(17) 「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ参らざりし」 (竹取物語 48)
(18) 花ざかりには、その宮へなむおはしましける。 (伊勢物語 183)
(19) 「おなじうは、院へまゐらむ」とて、ののしりて (蜻蛉日記 289)

5.2. Ⅱ 発話動詞の出現

発話動詞を取る用例は 2 例確認される。更級日記の用例は建造物接続ではないが、落窪物語で確認された用例は「大将」という人物を示す語に建造物を接続させた形式を取る。

建造物接続形以外の用例

(20) 「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに、うちおどろきたれば、夢なりけりと思ふに (更級日記 340)
(21) 少将、兵部のもとへ、「かの聞こえしことは今宵なり。亥の刻ばかりにおはせよ」とのたまへば、 (落窪物語 154)

建造物の接続形

(22) 御返事はもろともに言ひあはせて、大将殿へ聞こえたまふ。 (落窪物語 297)

上記 (22)「大将殿」は、解釈に「左大臣道頼」とあることからも、人物を示す語の用例として扱うことは可能だと考える。

5.3. Ⅲ 人物を示す語の出現

平安時代資料と同様に、鎌倉時代編において建造物の接続形が確認された資料についての調査結果を示す。

表 7　鎌倉時代資料（説話・随筆）における「へ」の上接名詞句と係る動詞の分類

係る動詞	発話動詞		移動動詞・存在動詞		対象用例
上接名詞句	建造物	非・建造物	建造物	非・建造物	
今昔物語集	0	0	4	293	297
宇治拾遺物語	1	0	3	248	252
十訓抄	0	0	6	142	148
徒然草	0	0	4	38	42

表 8　鎌倉時代資料（日記・紀行）における「へ」の上接名詞句と係る動詞の分類

係る動詞	発話動詞		移動動詞・存在動詞		対象用例
上接名詞句	建造物	非・建造物	建造物	非・建造物	
建礼門院右京大夫集	0	1	0	33	34
十六夜日記	0	1	2	16	19
とはずがたり	4	9	21	256	290

この段階の発話動詞を取る用例を見ると、その上接名詞句には建造物接続形以外の名詞句も確認されるようになる。

建造物の接続形以外の用例

(23) 阿証聖人の御もとへ申しつけて、供養せさせたてまつる
(建礼門院右京大夫集 115)

(24)「変る御気色見ゆる」とて、御所へ申したれ　(とはずがたり 211)

(25)「御所よりも御室へ申されて、御本坊にて、愛染の法、鳴滝、延命供とかや、毘沙門堂の僧正、薬師の法、いづれも本坊にて行はる。　(とはずがたり 251)

(26) 春宮大夫言はるれば、「東二条院より、『歌ばし召さるな』と准后へ申されけるよし、うけたまはりし」など申して　(とはずがたり 414)

上記のように、とはずがたりでは地位・役職名を取る用例も確認される。発話動詞を取る場合の建造物接続形は人物を示す語として捉えるが、「御所」「御室」も人物を示す語として用いられていることが頭注によって確認される。宇治拾遺物語の「院」は第五十七代天皇の「陽成院」、とはずがたりの「御所」と「新院」は「後深草院」、「御室」は「仁和寺性助法親王」、「准后」は北山の准后「貞子」と記述がある。このように、鎌倉時代における資料において建造物接続形と建造物接続形以外の名詞句が確認されるが、いずれにおいても高位人物を示すものであった。これは鎌倉期の資料とされる覚一本平家物語との共通点と言える。

以上、「へ」の通史的な流れとして確認したことを纏めると次のようになる。

・奈良時代資料では移動動詞を取る用例の上接名詞句として、場所を示す国名や地名を表す語が確認される。

・平安時代資料では、移動動詞や存在動詞を取る用例に建造物の単独形―「殿」「宮」「院」―が見られる。発話動詞を取る用例としては場所を示す代名詞や形式名詞

—「かしこ」「もと」—を取る用例、それに加えて人物を示す語に建造物が接続した名詞句—「大将殿」—がある。

・鎌倉時代資料では「准后」のような地位・役職名が確認される。

このように「へ」の用例を通史的に見ていくと、上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への拡張には場所から人物への段階ごとの過程が見て取れる。この通史的な流れによると、建造物接続形を取る名詞句の出現は場所名詞から人名詞へと直ちに場所性が失われた名詞句へと替わるのではなく、一時的に場所性を有する建造物接続形に取って置かれたこととして捉えることができる。これは奈良時代資料における「へ」が場所を示す語であったことと考え合わせると、名詞における場所性名詞との関与が推測される。ただこの分類[注5]について言及するには、新たに通史的調査が必要であるため本稿では可能性の指摘に留める。しかしながら「へ」が場所性を有する語と繋がりを以て拡張した過程は明らかに言える。そして一方では婉曲用法としての建造物接続形も存在しており「へ」の係る動詞が謙譲語に偏る、という現象も見られる。これらの結果に基づき「へ」の使用が謙譲語に偏るのは、場所性と婉曲用法との重なりによる相乗効果であって、「へ」に上位待遇の意味があったのではないと考える。

6. まとめと考察

本稿では「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への過程を調査してきた。その結果として、「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への過程には、建造物を示す語、そして人物を示す語に建造物を接続した名詞句の存在を確認した。これは「に」は始めから人物を指す名詞句を受ける用法が確立していたのに対し、「へ」では場所名詞から人名詞へと拡張される過程をもつ。そのつなぎの部分に、建造物を示す名詞によって間接的に人を表わす建造物接続形が介在したものと考えられる。この建造物接続形というのは、主に人物を示す名詞的形態素に建造物を指し示す形態素を接続した名詞句である。その場合には、人物を示すものと場所や建造物を示すものとのいずれの概念を含むものであるのか明確に区分することができない。それゆえに建造物接続形が人物を示す語として用いられたものは間接的な婉曲表現と結びつきやすいものであったと考えたものである。

このように助詞の通史的拡張を考える際には、それが係っていく動詞の拡張を考えるだけでなく、係る動詞と上接名詞句の相関関係を明らかにすることが重要だと考える。今後は、通史的観点による更なる調査が課題である。

［注］

（1）通史用例における助詞「へ」の検索条件は、「短単位検索」で「語彙素読み」が「へ」、条件の追加「品詞」の「中分類」「助詞 - 格助詞」とした。奈良時代資料として『歌経標式』『古事記』『日本書紀』を加える。

（2）統計処理は柳井久江（2015）『エクセル統計』附録 CD『Statcel4』（オーエムエス出版）で行う。

（3）平安時代における敬称の接尾辞については、森野宗明（1971）により「―君」よりも「―殿」がより丁重な言い方として好まれていたこと、そして限定されていた「「―殿」呼称の一般化と拡大、それと表裏をなす「―君」呼称の縮小減退化は 11 世紀末から 12 世紀初頭にかけて著しく進展していたらしい。(p.173)」ことが資料名と共に記される。五島和代（1990）では、源氏物語を中心として中古期の「殿」と「君」の用法を明らかにしている。そこでは、殿舎を指すのが原義であった「殿」が、貴人を指したと思われる例が万葉集東歌において既に見られること、そして平安時代には殿舎とともに貴人をさす用例が広くみられるということが具体例を

以て記述される。

（4）奈良時代資料において「へ」の上接名詞句として確認された用例を示す。[] 内は原文の表記。

『万葉集』・天［阿米］ (800) ・足代［安太］ (1214) ・唐国［韓国］ (4240) ・紀伊［木］ (1680) (3321) ・国［国］ (2130) ・［久尓］ (3996) ・桜田［櫻田］ (271) ・佐保の内［狭帆之内］(1827) ・新羅［新羅］ (3587) ・筑紫［都久之］ (4422) ・宮［宮］ (886) ・都［美夜古］ (4435) ・［美也古］(944) (4472) ・大和［倭］ (105) (280) (954) ・［山跡］ (2128) ・［夜麻登］ (3363) :『歌経標式』・水底［美那曽己］ (p.263) :『古事記』・国［玖邇］ (p.267) ・倭［夜麻登］ (p.268) :『日本書紀』・日本［耶麼等］ (p.243) ・難波［那儞婆］(p.243)

（5）現代語の場所性については、寺村秀夫（1992）、田窪行則 (1984) がある。現代日本語の名詞における分類、現れる環境については、田窪（1984）において明らかにされている。

第３章　平家物語諸本における助詞「へ」の用法
―発話動詞に係る「へ」と「に」の用法を中心として―

１．はじめに

現代日本語における「へ」は、「お客様へ申し上げます。」のように上接名詞句が人物を示す語の場合にも用いることができる。ところが万葉集における「へ」の上接名詞句は「地名もしくは「沖」「都」「天」のように比較的広大な意味の語が主（此島（1966）p.98）」であったとされている。人物を示す語が用いられるようになったことについては、室町時代の文献を挙げ「「与える」「告げる」系統の動詞に対してはその動作の向けられる人を表わす語が用いられるように（同書 p.99）」なったことが説明される。上接名詞句として人物を示す語を取る用例において、「に」とは異なる「へ」の特徴が認められることを指摘したのは黒星（1997）（2023）である。調査は平家物語の覚一本を中心として行われたもので、他の諸本については記述が見られない。平家物語には多くの諸本の存在が認められており、平家物語の用法を知るためには諸本についても調査する必要がある。

平家物語諸本の調査において、本稿で特に注目したいのは諸本を通して見た場合の「へ」と「に」の用法である。『平家物語大事典』には、諸本の本文が現存本に至るまでの過程で相互に影響し合い、しかも複雑な過程を辿っていることが記述されている。そこで語り本系における屋代本と覚一本との同一場面の用例を比較すると、異なる点が確認される。以下は、覚一本における「へ」の用例と屋代本を比較したものであるが、ここでは係る動詞が異なる用例となっている。

(a)同四月三日、西国の早馬付て、院御所へ参る。其使は源八弘綱とそ聞へし。（屋・3・260）

(b)同四月三日、九郎大夫判官義経、源八広綱をも（ッ）て、院の御所へ奏聞しけるは　（覚・下・343）

その他にも、屋代本では「小松殿に申て遂に出家し給けり（屋・１・202）」と助詞が「に」となっているものが、覚一本では「小松殿へ申されければ、此由法皇へ伺申て御免ありけり（覚・上・187）」のように「へ」で表される箇所がある。また屋代本では「鎌倉殿に子細を申さんとて、大宮司の許へそ御坐ける（屋・2・384）」と「殿」接続の名詞句となっているものが、覚一本では「関東へ子細を申さむとて、尾張国熱田大郡司が許にお

はしけるに（覚・下・161)」という場所を示す語となっている用例も確認される。このように上接名詞句、助詞、係る動詞の三者それぞれの語を比較した場合には、諸本相互に異なる点が認められる。では、助詞「へ」と「に」の用法については、どうであろうか。覚一本を対象とした調査では、「へ」には「に」と異なる特徴が認められるとされる。とすると、その特徴は他の諸本にも等しく認められるものであるのかということが疑問となってくる。

これまでの研究では、平家物語諸本間における本文の異同については論じられてきたが、「へ」と「に」の用法の違いについての記述は見られないようである。本稿では、古本系の平家物語諸本を対象として、古本系諸本における「へ」の特徴と「へ」と「に」の違いに注目して、「へ」の使用実態についての調査を進めていく。

２．先行研究

2.1. 平家物語諸本の分類

渥美（1962）では「増補系と語り系の記事の対照を概観するためのもの（p.378)」として、平家物語諸本記事対照表(1)を挙げた。『平家物語大事典』では、諸本の研究(2)について「諸本の本文が、現存本に至るまでの過程で相互に影響し合い、あまりにも複雑な過程をたどっているために、系統図を書いたり、現存本のどれか一つを選んで祖型に据えるというようなこともできないということであった（佐伯真一・櫻井陽子 p.708)」とこれまでの状況を説明する。現在においては「一般的に認められているのは、諸本全体を大きく「語り本系」と「読み本系」(「語りもの系」と「読みもの系」とも）の二つのグループに分けること（同書 p.709)」とされている。渥美（1962）については「諸本を増補系と語り系に大別すると同時に平曲の一方・八坂二流分岐を境に鎌倉期諸本と室町期諸本に大別」し、「系統図と時間軸の中に現存諸本を配置するという方法を採った」事は、「諸本全体についてそのような展望を示したのは画期的な試みであった（同書 p.714)」と評価する。

2.2.「へ」の通史的拡張

助詞「へ」の係る動詞に制約があることを発見し、その通史的過程を明らかにしたのは石垣（1955）である。そこでは奈良時代より認められる「へ」は「動作の経由を表わしてゐるもの（pp.57-58)」であったが、平安時代以降には具体性のない心理作用に「へ」が用いられるようになり、鎌倉時代には「何等の経由性を見る事が出来ない（p.69)」用例が見出されるとして、『宇治拾遺物語』の「申す」の用例が挙げられている。青木（1956）は、「移動性を有たない動作に対しての目標」を示す用例が「宇治拾遺の三例を魁として、古今著聞集以後は非常に多く用ひられるに至る（p.115)」と記述する。人物を示す用例

については、「「へ」の受ける語は、広い方所から狭い場所、さらには一般の物へとその範囲を広げ、目標よりも帰着の意を強くして来ると共に、一方で「与える」「告げる」系統の動詞に対して」の「動作の向けられる人を表わす語が用いられるように（此島（1966）pp.98-99）」なったことが説明される。

2.3. 平家物語諸本における「へ」と「に」の用法

山田（1967）は、延慶本における「へ」について、「「に」の求心的にそれに近づくべき目標を示せるものと何等の差異なくなりぬ（下 p.1549）。」として、係る動詞に「申す」をとる用例を挙げている。黒星（1997）は、蒲原（1991）をもとに中世期資料の発話動詞の用例について調査を行ない、上接名詞句が人物を示す語の場合、「へ」では身分・地位が高位に偏るということを指摘し、待遇表現との関係を推測する。黒星（2023）は「へ」の上接名詞句が人物を示す語を取るに至るまでの拡張過程を明らかにした。その上で中世期資料において指摘される「へ」の上接名詞句の特徴について、建物を示す語と婉曲用法との重なりによる結果としての考えを示している。すなわち、上接名詞句が場所を示す名詞句から人物を表わす名詞句へと拡張していく過程には、人と場所の両方を指示することができる建物を表わす名詞が介在している。建物を示す語は建物を示す語であると同時に婉曲用法として人物を示す語であるとの二面性を持つ。この場所と人物とのいずれにも用いられる語が人物を示す用例に繋がるとともに、婉曲用法であるがゆえに係る動詞が謙譲語へ偏るという現象を生じさせたという考えである。しかし、ここに覚一本以外の平家物語諸本についての言及はない。また上接名詞句における分類別調査に「中」「前」のような相対的な位置関係を示す語の用例は含まれない、など問題は残されている。

本稿では、黒星（2023）を踏まえ、そこで扱われなかった名詞句も加えた上で平家物語古本系の諸本を対象として、上接名詞句の分類を行い、「へ」と「に」の相違点と共通点、及び係る動詞との関係を検討する。

以後、次のように進めていく。まず 4.1 節にて平家物語諸本における発話動詞の用例を対象として、「へ」と「に」の上接名詞句を性質ごとに分類し、上接名詞句における「へ」と「に」の共通点と相違点を明らかにする。次に 4.2 節にて、上接名詞句において「へ」の特徴として認められる用例を取り上げ、係る動詞における「へ」と「に」の比較をもとに、「へ」の特徴的用法と係る動詞との関係について考察する。最後の 5 節にて、平家物語諸本の調査結果として「へ」の特徴と「へ」と「に」の違いについて記述する。

３．調査資料と調査方法

諸本の調査、及び配列は渥美（1962）を参考とした。調査対象は、古本系の読み本系

では源平闘諍録　四部合戦状本　南都本　南都異本　延慶本　長門本　源平盛衰記である。古本系の語り本系では屋代本　平松家本　竹柏園本　鎌倉本　百二十句本（国立国会図書館蔵本）　覚一本である。資料名は次のように省略して記す。

源平闘諍録＝闘　四部合戦状本＝四　南都本＝南　南都異本＝異
延慶本＝延　長門本＝長　源平盛衰記＝源　屋代本＝屋　平松家本＝平　竹柏園本＝竹　鎌倉本＝鎌　百二十句本＝百　覚一本＝覚

用例の所在は、カッコ内に諸本名・巻・ページ数の順に記す。翻刻が出版されているものは翻刻本の所在を記す。

先行研究によると、諸本の本文は現存本に至るまでの過程で相互に影響し合い、複雑な過程を辿っているということであった。よって本稿では、読み本系と語り本系の違いや諸本相互の関係については言及しないこととする。

係る動詞は発話動詞を対象とする。本稿では「へ」の通史的拡張過程の中で、経由性の移動を表わす動詞から移動性のない方向性のみを表わす動詞への拡張は注目すべき拡張だと捉えるが、その「経由性を見る事が出来ない（石垣（1955）p.69)」として挙げられたのが『宇治拾遺物語』の「院へ申す」という発話動詞の用例であったためである。発話動詞の基準は、『日本古典対照分類語彙表』(2014）において挙げられた言語活動動詞の中で、平家物語において用いられた「へ」の係る動詞とする。そのうち複合形の動詞は、発話以外の語義を含むため調査対象から除外する。結果、本稿で対象とする発話動詞は以下の動詞となる。

【調査対象の動詞】　「奏す」「奏聞す」「申す」「仰す」「宣ふ」

平家物語における書状には、諸本により助詞を確定することができないものを含むため調査対象から除外する。

上接名詞句の分類は、Ⅰ場所を示す語[3]、Ⅱ建物を示す語、Ⅲ人物を示す語、の 3 項目に分けた上で、名詞句の性質によって 5 類に下位分類した。

Ⅰ.場所を示す語

①【場所】　場所や地名を示す語…屋島　大宰府　都など

②【位置・方向】　相対的な位置関係を示す語　方向を示す語[4]
形式名詞　及びその接続語…前　所　方など

Ⅱ.建物を示す語

③【建物】　建物を示す語、及びその接続形…殿　宮　房　室など

Ⅲ.人物を示す語

④【地位・役職】　地位や官職を示す語…法皇　宰相　武士など

⑤【個人名・他】　個人名　親族語　人間関係を表わす語　神など

4．諸本における「へ」と「に」の用法

4.1. 上接名詞句の分類による「へ」と「に」

まず、読み本系と語り本系における「へ」と「に」について、上接名詞句の分類との対応をまとめた表 1 を挙げる。（比率は小数点第 2 位以下切り捨てとする。）

表 1　上接名詞句の分類による「へ」と「に」の用例数（読み本系と語り本系）

諸本のグループ	「へ」の上接名詞句						「に」の上接名詞句					
	「へ」	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ		「に」	Ⅰ		Ⅱ	Ⅲ	
	用例数	場所	位置・方向	建物	地位・役職	個人名・他	用例数	場所	位置・方向	建物	地位・役職	個人名・他
読み本系	109	18	34	53	4	0	430	4	16	67	177	166
語り本系	114	52	22	36	4	0	221	1	6	50	86	78
合計	223	70 (31.3%)	56 (25.1%)	89 (39.9%)	8 (3.5%)	0 (0.0%)	651	5 (0.7%)	22 (3.3%)	117 (17.9%)	263 (40.3%)	244 (37.4%)

上記の表では、上接名詞句の性質をⅠ～Ⅲの 3 類に分類している。本節では、この分類をもとに具体例を確認しつつ「へ」の特徴と「に」との共通点を述べて行く。

4.1.1. Ⅰ場所を示す語

まず【場所】の類における具体例を以下に挙げる。この類の名詞句は、「に」が全体の 0.7%と少ない点が注目される。「に」の用例は「へ」とどのような違いがあるのか、以下より具体例を見て行く。

表 2　【場所】における「へ」と「に」の上接名詞句（読み本系と語り本系）

	諸本名	「へ」の上接名詞句		「に」の上接名詞句	
		用例数	① 場所	用例数	① 場所
読み本系	源平闘諍録	7	西国・屋島3・都・小室・陣	0	
	四部合戦状本	1	鎌倉	0	
	南都本	4	関東2・西国・東山	0	
	南都異本	1	彼国	0	
	延慶本	3	内裏・鎌倉2	1	内裏
	長門本	1	内裏	1	諸寺諸山
	源平盛衰記	1	屋島	2	北嶺・諸寺諸山
語り本系	屋代本	4	関東2・大宰府・内	0	
	平松家本	7	関東・都3・大宰府・厳島・内裏	0	
	竹柏園本	11	関東3・都3・福原・大宰府・屋島・内2	0	
	鎌倉本	11	関東3・都4・福原・大宰府・内2	0	
	百二十句本	8	関東2・都2・福原・大宰府・内裏2	0	
	覚一本	11	関東2・都5・鎌倉・福原・大宰府・内裏	1	厳島

＊屋代本、竹柏園本、鎌倉本における「内」は「内裏」を指す。

上記表によって具体例を比較した場合、「へ」と「に」の違いとして挙げられるのは地名が明示された名詞句の有無である。「へ」には「屋島」「鎌倉」のように地名が明示さ

れた名詞句が含まれているが、「に」では「厳島」1 例である。この用例については、前後文脈を見ると「厳島」に対する土地信仰(5)の表現であることが明らかであるため、調査の対象外とする。

(1) わがあがめ奉る安芸の厳島に申さんとて、月まうでを始て、祈り申されければ、中宮やがて御懐妊あ（ッ）て、思ひのごとく皇子にてましましけるこそ目出たけれ。（覚・上 223）（類例　平・110）

では地名が明示された用例と「諸寺諸山」のように地名が表されない用例とでは何が異なるのか。以下、地名と人物の対応関係を中心に検討を進める。まず、地名が明示された用例を挙げる。

◆地名が示される「へ」の用例

(2)「是は小松内府が末子にて候けるを、（略）あしかるべしと思食れ候はゞ、鎌倉へ此由を申させ給て、其左右に随せ給へかし」と宣ひければ、上人憐給て、東大寺油倉と云所にすへ奉りて、忩ぎ鎌倉へ使を立て、二位殿に被申たりければ（延・下・540）

(3) 左馬頭義仲は（略）今は平家と一つに成つて、兵衛佐をせめんと思ふ子細を讃岐の屋島へ申しければ、大臣殿は大に悦び給ひけり（源・下・69）

(4) 野尻の二郎惟村を使者で、大宰府へ申けるは、「平家は重恩の君にて（略）」と申をく（ッ）たりければ、平大納言時忠卿、ひをぐゝりの直垂に糸くずの袴立烏帽子で、惟村にいでむか（ッ）ての給ひけるは、（覚・下・132）

上記（2）～（4）の「へ」の用例には、発話行為に対応した人物による表現が見られる。(2)「鎌倉へ」は、頼朝が平家の公達を斬っていく状況の中で宗実が俊乗房の許に逃れて来た場面である。宗実は自らの出自を明かした上で、「恐ろしいとお思いならば、宗実が逃れて来ていることを鎌倉へ伝え、それに従って下さい。」と、頼朝から許されるか否かの判断を仰ぐように申し出る。この状況を考えあわせると「鎌倉へ申す」は、許すか否かの判断を下す頼朝へ知らせることを表わしたものとして捉えられる。(3) では対応した大臣殿の喜ぶ様が表される。(4) の「大宰府へ」は、対応した平大納言時忠の行動と発言が表される。ところが地名が明示されない用例では、以下のように人物の対応表現を確認することはできない。

◆地名が示されない「に」の用例

(5) 其時、帝、民をあはれ給御こゝろさしふかくして、諸寺諸山に仰せて、是をいのらせ給ひけれとも、更に其しるしなかりしかは（長・1・105）

(6) 頼朝の謀叛には、尤も南都、北嶺に仰せて、天下安穏の祈をこそ仰せ付くべきに、入道の憤り深ければ、其事既に治定すと披露ある（源・上・271）

(7) 公卿僉議あつて、祈祷ある可きの由諸寺諸山に仰す（源・下・271）

(8) 京に紺掻にてありける、字五郎と申ける者、博士判官兼成に付て、義朝の首給て可孝養由し申たりければ、兼成内裏に申て免れたりけるを、紺掻、うれしと思て、件の首を取て、獄門の戌亥の角に墓を築て埋たりけるを（延・下・144）

(5) ～ (7) は、「諸寺諸山」などに所属する僧侶に対して世の平安を祈ることを「仰す」で表現する。これは僧侶達への命令として捉えられるが、ここに僧侶たちの対応は表されていない。(8) では、紺掻が自身の申し出を許されたことに喜ぶという紺掻本人の行動は表されるが、「申す」対象となる「内裏」の対応は表現されていない。

上記のように表現の違いに注目した場合、地名が明示された場所には人物との繋がりが推測されるものとなっている。その点に関しては『平家物語大事典』にも記述が見られる。「鎌倉」は源頼朝のときから源氏の本拠地として定まった場所であること、そして『吾妻鏡』には頼朝が新邸に移った後に「しかりしより以降、東国皆その有道を見て、推して鎌倉の主となす（p.85）」と、頼朝が「鎌倉主」と称されたことが記述される。「屋島」は都落ちした平家が九州を拠点としようとして失敗した後に移った場所である。その後は「攻め落とされるまでの一年半ほど（足かけ三年）にわたって平家の拠点となり、総大将の平宗盛は「屋島の大臣」などとも呼ばれた（p.442）」とされる。つまり土地の統治者や権力者は、権力者であると同時にその地と強い繋がりを持つ人物として認められる存在であった。ゆえに権力者を指し示す場合に地名を以て表わすことも可能になったと考えられる。では「に」が全体の 0.7%という僅少例に留まるのは何故か。この点については、奈良時代より認められる「へ」の上接名詞句が場所を示す語であったことと考え合わせると、場所を示す語は主に「へ」を以て表されるものであり、「に」は一部の資料にのみ見られる例外的な存在であったと推測することもできるのではないかと考える。

次に【位置・方向】について述べる。この類では、「へ」と「に」の共通点として、敬称として用いられる語が含まれることが挙げられる。

表 3　【位置・方向】における「へ」と「に」の上接名詞句（読み本系と語り本系）

諸本名		「へ」の上接名詞句		「に」の上接名詞句	
		用例数	② 位置・方向	用例数	② 位置・方向
読み本系	源平闘諍録	4	許2 御所2	1	方
	四部合戦状本	4	御所2・許2	2	御中・方
	南都本	7	許3・中・御中・方・御所	0	
	南都異本	1	御中	0	
	延慶本	3	許2・方	7	御中・方4・御前2
	長門本	3	許2・御中	4	方2・御前2
	源平盛衰記	12	御中・許4・御方2・方2・方々・御所2・内	2	方・御方

語り本系	屋代本	2	御中・方	1	方
	平松家本	4	許・御中・方・御所	1	方
	竹柏園本	1	御中	1	方
	鎌倉本	5	御中・許・方・御所2	0	
	百二十句本	2	御中・許	3	方2・御前
	覚一本	8	御中2・御方2・許・御所3	0	

「方」「もと」「内」は方向や相対的な位置関係を表わすが、そのうち「御」を前接した「御方」「御前」は婉曲的に人物を指し示すという敬称(6)としての用法を併せ持つ。ゆえに、このような敬称が発話動詞に用いられた場合、その名詞句は人物を示す語として捉えることも可能だと考える。

◆【位置・方向】を示す用例

(9) 小博士を御使にて能登殿の許へ仰せられけるは（四・389）

(10) 化女に使者を副へて、幽王の方に申されけるは（闘・上・396）

◆【位置・方向】において敬称の用法を併せ持つ用例

(11) 宗盛卿、院の御所へ奏せられけるは（源・上・436）

(12) 人行向て此由を義王御前に申ければ（延・上・40）

(13) 小松大臣、中宮の御方へ申さるべきことあつて（源・上・229）

以上、【場所】の類については、「へ」の用例における特徴として、地名を表わす名詞句が含まれることと、発話行為に対応する人物が表現されていことの 2 点を挙げた。その上で、地名が明示された名詞句には統治者や権力者を指す場合に用いられるものがあることを指摘した。【位置・方向】の類では「へ」と「に」が偏りなく用いられていることと、敬称としての用法を併せ持つ名詞句が含まれることを確認した。

4.1.2. Ⅱ建物を示す語

【建物】の類における名詞句は、建物を示す語の単独形、及びその接続形である。この類では、「へ」と「に」のいずれにも婉曲用法として人物を示す用法を併せ持つ名詞句が含まれる。以下の表 4 に具体例を挙げる。

表 4　【建物】における「へ」と「に」の上接名詞句（読み本系と語り本系）

諸本名		「へ」の上接名詞句	
		用例数	③ 建物
読み本系	源平闘諍録	1	鎌倉殿
	四部合戦状本	10	院2・女院2・宇佐宮・鳥羽殿・近衛殿・殿下 大臣殿2
	南都本	6	平家2・公家・院2・法住寺殿
	南都異本	2	大臣殿・院
	延慶本	14	院4・女院・宇佐宮・鳥羽殿・鎌倉殿・関白殿 大臣殿2・普賢寺殿・御室・公家
	長門本	10	院3・関白殿・大殿・大臣殿・近衛殿・二位殿 御室・公家
	源平盛衰記	10	院・女院・宇佐宮・小松殿・関白殿・木曽殿 入道殿・能登殿2・御室

「に」の上接名詞句	
用例数	③ 建物
7	高倉院・入道殿・小松殿・関白殿・新三位中将殿 右兵衛佐殿・公家
7	院2・内大臣殿・大臣殿3・公家
5	小松殿・鎌倉殿2・北条殿・平家
0	
18	後白川院・八条の院・院2・入道殿3・大臣殿2 鎌倉殿・兵衛佐殿2・宰相殿・二位殿2　…他2例
18	八条院・院・入道殿4・大臣殿2・九郎殿・二位殿 兵衛佐殿2・侍従殿・鎌倉殿・公家・武家…他2例
12	大臣殿・入道殿3・小松殿・佐殿4・兵衛佐殿 鎌倉殿・殿下

		「へ」の上接名詞句	
		用例数	③ 建物
語り本系	屋代本	2	院・殿下
	平松家本	4	大臣殿・入道殿・鳥羽殿・殿下
	竹柏園本	8	鳥羽殿・大臣殿・鎌倉殿2・門脇殿・公家2・殿下
	鎌倉本	9	鳥羽殿・大納言典侍殿・大臣殿・殿下 小松殿2・法住寺殿・公家2
	百二十句本	4	院・法住寺殿・鎌倉殿・平家
	覚一本	9	殿下・小松殿2・鳥羽殿・鎌倉殿・大納言佐殿 八条女院・公家・平家

「に」の上接名詞句	
用例数	③ 建物
8	大臣殿・木曽殿・鎌倉殿・入道殿・左馬の頭の殿
5	入道殿2・木曽殿・女院・尊武彦の宮
9	院・女院・武彦の宮・大臣殿・入道殿・小松殿 鎌倉殿・木曽殿・法住寺殿
7	入道殿2・鎌倉殿2・木曽殿・小松殿・法住寺殿
11	院2・武彦の宮・法住寺殿・左馬頭殿・大神殿 入道殿2・小松殿・木曽殿・公家
10	女院・八条女院・大臣殿2・入道殿・小松殿 鎌倉殿2・三位殿・公家

上記の具体例を見ると、「に」では「九郎殿」「武彦の宮」のように個人名の明示された名詞句が確認される。それに対して、「へ」では大臣や大納言以上の地位を示す名詞句が中心となっており、そこに個人名を明示したものは含まれない。

◆【建物】において個人名の明示された用例

（14）さねひら、「御そうしにこそ申候はめ」とて、九郎殿に申（長・4・96）

（15）虜の夷共を武彦の宮に仰て帝へ奉り給（竹・下・352）

以上、【建物】の類は、敬称として人物を示す用法を併せ持つという点は「へ」と「に」に共通するが、一方では個人名を明示した名詞句は「へ」では見られないという違いがあることを確認した。

4.1.3. Ⅲ人物を示す語における「へ」と「に」

人物を示す語の【個人名・他】の類では「へ」の用例は確認されない。この点は、【建物】の類において個人名を明示した名詞句が「へ」では見られなかったことに通ずる。とすると【個人名・他】の類は「へ」の特徴として捉えられる。

以下、表５に【地位・役職】の類に表わされた具体例を示す。

表５－１　【地位・役職】における「へ」と「に」の上接名詞句（読み本系と語り本系）

諸本名		「へ」		「に」	
		用例数	④ 地位・役職	用例数	④ 地位・役職
読み本系	源平闘諍録	0	―――	6	御門・王・官兵・祇園別当・長吏2
	四部合戦状本	1	法皇	15	国王・内大臣・禅門・関白・神祇官・座主・武士3 職・検非違使・殿上人・侍臣・長者・上日の者
	南都本	0	―――	24	御門・聖・親王・大納言・大名・兵衛佐3・判官3 重盛卿・別当・大納言の卿・武士5…　他5例
	南都異本	0	―――	2	中将・弁
	延慶本	1	法皇	66	法皇5・皇帝・秦皇・入道7・大納言・大将軍・聖主 兵衛佐3・内大臣2・中将・禅門・座主…　他41例
	長門本	0	―――	29	法皇2・皇帝・少将・中将・大臣・内大臣・兵衛佐 君3・大将軍・僧正・頭弁・別当・仏士…　他13例
	源平盛衰記	2	法皇　上人	35	帝・大臣・内大臣・大理・右大将・関白・兵衛佐 入道・朝臣2・大蔵卿・高僧貴僧・前司2‥他21例
語り本系	屋代本	0	―――	14	天皇・入道相国・入道・大納言3・侍従・判官2 大宮司・祇園別当・女房共・京侍・武士
	平松家本	1	帝	9	入道相国2・判官・大納言・法印 高僧貴僧・長吏・持僧共・武士
	竹柏園本	0	―――	16	入道・入道相国・大僧正・平大納言・判官3・座主 長吏・祇園の別当・北条・女房・乳母・…　他3例
	鎌倉本	1	帝	11	入道相国・大僧正・判官3・座主・別当・高僧 高僧貴僧・重盛卿・女房共
	百二十句本	1	帝	13	入道相国・入道2・大将・判官2・座主・別当 平大納言・高僧貴僧・女房共・京侍・武士
	覚一本	1	法皇	23	入道相国2・宰相2・判官・大将・将軍・女房ども 高僧貴僧・長吏・座主・祇園別当・武士2…他9例

上記で示した【地位・役職】の類における名詞句を身分・地位の高低として見た場合、「へ」には最高位を表わす名詞句に限定されるという特徴が見て取れる。一方の「に」では、高位から低位までの広範囲の身分・地位を表わす名詞句となっており、その中に際だった特徴は見出せない。

◆上接名詞句に皇族を表わす語が用いられた用例

（16）法住寺殿へ馳参て、ひそかに法皇に申けるは（延・下・67）

（17）世の世にても有らばや、法皇へも申すべし（四・152）

（18）官人是を取て帝へ奏聞す（平・2・172）（類例　鎌・2・49）

以上、【個人名・他】の類において「へ」の用例が確認されなかったことは、「へ」の特徴として捉えられるという考えを示した。【地位・役職】の類は、身分・地位の高低という観点から捉えた結果として、「に」は高位から低位までの広範囲な身分を示す名詞句であるが、「へ」では最高位の地位に限定されるという違いを指摘した。

4.2. 係る動詞における「へ」と「に」の違い

これまでの調査によって、上接名詞句の分類によって「へ」と「に」の用法が異なることを確認した。なかでも【場所】と【地位・役職】の類では、「へ」と「に」との間で顕著な違いが見られるという点で注目された。本節ではこの 2 つの分類を取り上げて、上接名詞句と係る動詞との相関関係について検討する。

係る動詞を尊敬語と謙譲語に分類し、その動詞に表された助詞の用例数を纏めたものが、以下の表 6 と表 7 である。(「奏す」は「奏聞す」に加えて計上した。)

表 6　【場所】における「へ」と「に」の係る動詞（読み本系と語り本系）

諸本のグループ	「へ」の係る動詞					「に」の係る動詞				
	「へ」用例数	謙譲語		尊敬語		「に」用例数	謙譲語		尊敬語	
		申す	奏聞す	仰す	宣ふ		申す	奏聞す	仰す	宣ふ
読み本系	18	17	0	1	0	4	1	0	3	0
語り本系	52	42	10	0	0	1	1	0	0	0
合計	70	69		1		5	2		3	

上記の表 6 により、【場所】の類では「へ」における謙譲語への偏りが確認される。一方の「に」では少数ながらも尊敬語と謙譲語に渡って用例が見られる。

表 7　【地位・役職】における「へ」と「に」の係る動詞（読み本系と語り本系）

諸本のグループ	「へ」の係る動詞					「に」の係る動詞				
	「へ」用例数	謙譲語		尊敬語		「に」用例数	謙譲語		尊敬語	
		申す	奏聞す	仰す	宣ふ		申す	奏聞す	仰す	宣ふ
読み本系	4	4	0	0	0	177	80	13	70	14
語り本系	4	0	4	0	0	86	42	1	27	16
合計	8	8		0		263	136		127	

表 7 の【地位・役職】の類においても、【場所】の類と同様に「へ」の謙譲語への偏りが確認される。対する「に」では謙譲語と尊敬語とのいずれにも用例が見られることと比較すると、その偏りは「へ」の特徴として捉えられる。

◆【地位・役職】における「に」の用例

（19）別当、精進潔済して事の由を神祇官に奏聞す（四・50）

（20）伊豆守、父の入道に此由を申す（延・上・405）

（21）兄人平大納言時忠卿にかくと仰せられければ（源・上・155）

（22）一院還御の後父大納言重盛卿に宣ひけるは（鎌・15）

以上、上接名詞句において「へ」と「に」の間で顕著な違いが認められることから、【場所】と【地位・役職】の類における上接名詞句と係る動詞との関係を見てきた。結果、この 2 類の上接名詞句の場合、「へ」の係る動詞は謙譲語に偏るという特徴が認めら

れた。では「へ」の謙譲語への偏りは上接名詞句とどのように関わるのか。【場所】の類では「鎌倉」と「鎌倉主」と称された「頼朝」のように地名とその地における権力者との強い繋がりが推測されることを指摘した。【地位・役職】の類では、身分・地位の高低という観点により、「へ」の上接名詞句は最高位に限定される名詞句となっている点を挙げた。この 2 類を通してみると、その共通点として人物の身分・地位が高位という点が想定される。とすると、係る動詞における謙譲語への偏りは、上接名詞句における婉曲用法との間接的な繋がりに関与するものとして仮定することもできるのではないかと考える。

このように上接名詞句における高位人物との繋がりを考える場合、「へ」と「に」の間に数値上の顕著な違いが見られなかった【建物】と【位置・方向】の類においてもその可能性が推測される。ことに覚一本では、【建物】の類が、検定により「へ」と「に」の上接名詞句が建物の接続形であるか否かの違いに有意差が認められた（黒星（2023））という点からも注目される。ここで言う「へ」と「に」の違いとは、「へ」の上接名詞句は建物接続形が多く非接続形は少ないが、対する「に」では建物接続形が少なく非接続形が多い、という数値比の違いを指す。しかしながら、この点については諸本ごとの個別の調査と検証が必要となるため、本稿では可能性の指摘に留める。

黒星（2023）では覚一本平家物語について、係る動詞の謙譲語への偏りは、上接名詞句における建物を示す語と婉曲用法との重なりによるものとして仮定されるという考えを示した。今回の平家物語の古本系諸本を調査した結果においても、その考えは支持される。

５．まとめと今後の課題

本稿では、「へ」の特徴と「へ」と「に」の共通点として以下のことを述べた。

◆「へ」の特徴

1. 人物を示す語の類において、個人名が明示された名詞句は確認されない。地位・役職を示す語の類は、最高位を表わす名詞句に限られる。
2. 建物を示す語の類において、個人名の接続した名詞句は確認されない。
3. 場所を示す語の類には、地名が明示された名詞句が含まれる。その中には土地の統治者や権力者を指す場合に用いられるものがある。
4. 上接名詞句の中で、「に」との顕著な違いが認められるのは場所を示す語の類と地位・役職を示す語の類であるが、この 2 類の係る動詞は謙譲語へ偏ることが確認される。

◆「へ」と「に」の共通点

5. 建物を示す語と位置・方向を示す語の類のように敬称としての用法を併せ持つ

名詞句は、「へ」と「に」のいずれにも用例が見られる。

本稿では、読み本系と語り本系の古本系諸本を対象として「へ」と「に」の調査を行なったが、その結果として上接名詞句における「へ」の特徴と「へ」と「に」の違いは諸本を通して認められるという結果が得られた。章句の違いが確認される諸本において、「へ」と「に」の用法について諸本を通して認められたことは、「へ」と「に」の用法を観察するだけではなく、平家物語諸本の資料性を考える上でも無益ではないと考える。古本系以降の諸本を含め、鎌倉時代以降の資料における「へ」の検討は今後の課題である。

［注］

（１）　渥美（1962）の表では、以下の資料が挙げられる。（増補系は読み本系を指す。）
（増補系）源平闘諍録、四部合戦状本、南都本、延慶本、長門本、源平盛衰記
（語り系）屋代本、平松家本、竹柏園本、鎌倉本、百二十句本、覚一本（以上古本系）文禄本　中院本　加藤家本　如白本　内閣文庫本（以上　八坂本）

（２）　『平家物語大事典』において、「延慶本が現存諸本中で最も多く古態をとどめると見るのが通説であること（同書　佐伯真一 p.719）」と、「語り系諸本の中で屋代本が最古態であるとする説はほぼ通説の位置を得（同書　千明守 p.748）」ていると記述がある。覚一本については、「屋代本のような古態本文から「語り」による詞章熟成を経て変化し、文学的達成を遂げたのが覚一本であると見る論が数多く生み出された（同書　志立正知 p.725）。」と記される。今回の調査では古本系諸本全体の把握を目的としたため、諸本ごとの特徴などについては記述しなかった。

（３）　田窪（1984）では場所名詞は大きな分類として 4 類が示された。（以下、具体例を略して記述する。）

①「人」が関与している場所名詞　　a .地名／b .機関
②「人」が関与していない場所名詞　a .地名／b .自然物／c .建造物
③身体名称など
④相対名詞

（４）　「北の方」は「鎌倉時代までの古典語における尊敬語の語彙（西田 1990、p.317））」として説明されるが、その一方で「北政所と同じ。公卿殿上人の室をいう。（冨倉 1987、上 p.81）」ともある。本稿では形による分類を重視したため、位置方向を示す語の一つとして「方」の用例に加えた。

（５）　「厳島へ」の用例が土地信仰を表わすことは黒星（2023）にも記述がある。

（６）　西田（1990）では、日本古典文学大系『平家物語』を用いて、平家物語における敬語として詞・辞の分類の許に「尊敬表現」「謙譲表現」「自敬表現」（西田 1990　pp.288−299）について記述される。接頭語として用いられる「御（お）」「御（ご、ぎょ）」については、尊敬語の表現形式として以下の例が挙げられる。

（和語）お（御）―　おほ（大）―　おほみ（大）―　おほむ（御）
おほん（御）―　おん（御）―　み（御）―〔これらは本来、神、天皇等に関する事物に冠して、最大級の敬意を示すものであったが、次第に貴人にも用いられるられるようになった〕　（漢語）　御（ご、ぎょ）。(p.318)

第２部　移動表現における助詞「へ」の用法

第２部　　移動表現における「へ」の用法

第１章　高野本『平家物語』における「へ」と「に」
－「方向」と「帰着点」との関係についての一考察－

１．はじめに

現代日本語における「へ」と「に」は、「学校へ／に向かう」「講堂へ／に入る」のように、移動動作の「方向」、「帰着点」のいずれを示す場合にも用いられる。しかし、本来の「へ」は移動動作を表す目標の「方向」を示し、「に」は動作の「帰着点」を示す、という違いが説明される。

奈良時代の「へ」と共起する動詞は、「ゆく」「のぼる」のように動作の経由を表す限られた動詞であったが、その後次第に用法が拡張し、院政期以降には「告ぐ」「向く」のような移動性のない動詞にも用いられるようになる。そして「着く」などの動詞との共起により、「へ」は帰着点を示すようになったことが説明される。

このような移動動作の目標を示す場合、平安中期までの「へ」には、「に」と異なる特性として、「言語主体から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく（青木 1956）」意味を表すものであったことが、明らかにされている。しかし、用法拡張後の「へ」と「に」にはどのような相違点があるのか等については問題も残されている。院政期以降の「へ」が量的に増加し、「に」をも上回るほどになったことについて、資料の偏りや文体的な差異などが指摘されるものの、その詳細を論じたものは見られない。たとえば高野本『平家物語』を観察した場合、命令表現や仮定表現などの一部の表現形式では「に」は確認されず、「へ」のみで表されるという偏りが見られるが、これは何によるものであるのか明らかではない。

この点を問題として、本稿では高野本『平家物語』を対象として、移動動詞と共起する「へ」と「に」の調査を行う。本調査で着目するのは、各表現形式における「へ」と「に」に表わされた意味内容である。両助詞が表される表現形式の意味内容において、「へ」と「に」はどのような点で異なるのか、また「方向」「帰着点」との関係は見られるのか、について検討する。

２．先行研究

「へ」の通史的変遷における「に」との関係

『あゆひ抄』では「へ」は上接名詞句として場所や方向を示す語を取り、目標場所へ

の方向を示すものであることが説明される。

［何へ］何ハ、名のうちに方所なり．そのところいまたいたらすして其方をさしてゆく心也　へすなはち方の心ありて．万葉にゆくへをも行方とかける此心なり。（九邊家巻四）

山田（1980）では、「へ」と「に」は、同じく移動動作の目標を示すため混同しやすい。しかし、「に」では目標地点への到着地点を示すが「へ」は目標場所への方向を示すのみであり、その場所へ実際に行き着くか否かは問題としない、ゆえに「へ」の指し示す場所は漠然とした場所を示す、という違いが示される。

「へ」は動詞に對して用ゐらるゝ語に附属するものにして、文語にありてはその動作の進行するその目標所在の方向を示すものなり。この動作の進行する目標を示すといふことは「に」にも存するを以て往々混同せられ易し。されど「に」は動作の帰着すべき地位を示すに「へ」はその動作をその方向に進行するをいふのみにして、その動作者がその地點に實地に行きつくか、又はそこに止まるか否かは度外に置きたるものなり。この故に「へ」は地位としてはその指す所漠たるものとす。

石垣（1955）では、「へ」と共起する動詞には制約があることを発見し、「助詞「へ」の變遷發展は、具體的な接着性の捨象、概念的な方向性の抽象といふ事であり、大體鎌倉時代に發して室町時代に完成し現在に至つてゐる（pp.79-80）」として、「へ」の通時的拡張の過程を明らかにされた。

この論をうけ、青木（1956）では「に」との関係に目を向けた上での「へ」の通史的拡張過程を示された。

「へ」助詞は、同じく「移動々作の目標を示すが」「に」助詞と相違する特性は「言語主体の現在地点から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく、といふ意を担ふ」点にあると考へる（同 p.110）

その後、平安中期以降にはこの特性も次第に薄れて行き、その反面用法として「着く」などのように到着点を示す用法や、「申す」や「乞う」のように移動を表さない方向性のみを示す用法へと拡大する、という変遷過程が明らかにされる。それと共に、「移動動作の目標を示す」用法が「時代と共に量的に増加し」、「遂には「に」助詞をも凌駕するに至る（同頁）」ことについて数値比を以って示された。

此島（1966）では、「「へ」の用法拡張が、あまり多くない平安朝の用例において、もうかなりはっきり見られる（p.90）」として、古今集の歌の４例のうち２例が本によっては「に」になっている用例を挙げ「作者なり筆者なりはどちらか一方を用いたとしても、同時代の他の人がそれを別に直すということは、表現の際の両語間の差別にきわめて不安定なものがあることを示している（p.91）」として、両助詞の違いについて「多分に文体的な差を伴っていたかと思われる（同頁）。」という考えを示される。

中世期資料の「へ」と「に」の違いについて記述したものには、蒲原（1997）、黒星（2022、

2023）がある。しかし、これらは発話動詞と共起する用例のみを対象としたもので、移動動詞と共起する用例については記述がない。

３．調査の手段と方法

3.1. 資料と選定理由

本調査では覚一本系高野本『平家物語』を対象とする。その理由は、「へ」の経由性から方向性への拡張認められる院政期以降の資料であり、筆者が調査した鎌倉時代資料の中では「へ」の用例数も比較的多く確認された資料であることが挙げられる。他にも物語ゆえに人物関係や時間的な前後関係を把握しやすく、コーパスによって目的に応じた語の抽出を的確に行うことも可能だと考えたためである。本文テキストには『新編日本古典文学全集平家物語』（①・②）（市古貞次　校注・訳、2014・2015）を用い、対象用例の意味内容を中心として調査を進める。

3.2. 用例の抽出

用例の抽出には国立国語研究所（2025）『日本語歴史コーパス』バージョン 2025.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/　を使用する。

奈良時代編-万葉集の用例の抽出には国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス』バージョン 2024.3 https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/　を使用する。

第 4 節において対象とするのは以下の資料である。（奈良時代編）-万葉集）（平安時代編-仮名文学）竹取物語　伊勢物語　土佐日記　大和物語　平中物語　蜻蛉日記　落窪物語　枕草子　源氏物語　和泉式部日記　紫式部日記　堤中納言物語　更級日記　大鏡讃岐典侍日記／（鎌倉時代編-説話・随筆）方丈記　宇治拾遺物語　十訓抄　徒然草／（鎌倉時代編－日記・紀行）海道記　建礼門院右京大夫集　東関紀行　十六夜日記　とはずがたり／（鎌倉時代編-説話・随筆）今昔物語集　／（鎌倉時代編-軍記）保元物語　平治物語　平家物語／（室町時代編）虎明本狂言集／（室町時代編-キリシタン）天草版平家物語

『万葉集』では基本的に音仮名表記が確認された用例とする。動詞は他の資料と同じく移動性動詞に定める。よって、石垣（1955）で挙げられた「ます」「います」は本調査では対象外とした。ただ、体言接続など確実な用例数を計上することが難しいものがあるため、判断可能な用例を確認するのみとし、表中における数値の記述は行わない。

3.3. 分析対象と調査基準

調査対象は、基本的に移動主体を人物、上接名詞句では場所性名詞と方向を示す語、場所を示すことが確認された代名詞とする。また。コーパスによる検索においては、本文種別を「会話」とする。主体を人物とする理由は、現代語の移動表現研究においても、

人物主体は分析の標準単位とされていることや、「に」と異なる「へ」の特性が「言語主体の現在地点から遠く離れてゐる地点へ向って進んでゆく、といふ意を担ふ」点にある（青木 1956)」とされるのは、人物の意志的行為を基準としたものと考えたためである。

場所性名詞に限定する理由は、『あゆひ抄』において「へ」の上接名詞句が「方所」として説明されるが、「に」では「遊山に行く」などのように、場所以外の名詞句を取る用例も確認されるためである。名詞句の場所性の判別は、田窪（1984）[注1]を参考に行う。宗教との関係による名詞句、および具体的な場所として判断が難しい名詞句（「三界」「地獄」「もの」「陣」など）は対象外とする。移動を表わす動詞の判断は、『日本古典分類対象語彙表』、テキストの訳、寺村（1982）を参考として行う。文種として
以下、日本語歴史コーパスの「語彙素」の語形を示す。

本文種別を「会話」に限定する理由は、それにより発話者と上接名詞句〈人物〉との関係を把握することが可能になると考えたためである。

単独形動詞[注2]

上がる・行く・出でる・急ぐ・入(い)る・移る・落ちる・赴く・下りる・返る
駆ける・通う・来たる・来る・下(くだ)る・越える・進む・散る・近付く・着く
上(のぼ)る・入(はい)る・馳せる・引く・回る・向う・寄る・渡る・参る・罷る

3.4. 分類の基準

動詞に接続する助動詞、助詞、動詞の活用形、疑問詞を指標として、抽出された用例を以下のように分類する。

Ⅰ　過去･完了の助動詞以外の助動詞、助詞を伴う用例、疑問代名詞と共起する用例

否定：助動詞「ズ」
推量：助動詞「ジ」「マジ」「ム」「ムズ」「ベシ」「ラム」「ケム」
願望：助動詞「タシ」、助詞「バヤ」
疑問：代名詞「イヅク」「イヅチ」「イヅレ」「ドノ」、助詞「カ」
仮定：助詞「バ」（未然形接続）
伝聞：助動詞「ナリ」
命令：動詞の命令形

＊条件表現には、「タラバ」「ナバ」などの過去・完了の助動詞接続も含めて「仮定」として計上する。

Ⅱ　過去の助動詞、完了の助動詞を伴う用例

［過去・完了］過去：助動詞「キ」「ケリ」
完了：助動詞「ツ」「ヌ」「タリ」「リ」
（タリケリ・ニケリなどの複合形を含む。）

＊推量表現や仮定表現においては、ヌ・タリ・ツに接続したナム・テムや、タラバ・

ナバを推量表現や仮定表現として計上する。

Ⅲ　動詞終止形、助動詞を伴わない用例。

［無標・その他］：終止形の動詞、動詞連用形

助詞：接続助詞：「テ」「ガ」「バ（ハ）（已然形接続）」

係助詞：「ハ」「モ」／副助詞：「ダニ」「マデ」／格助詞：「ヨリ」「ト」

名詞_時：「時」「間」「程」「宵」「後」

場所を表す名詞：「所」「船津」／場所以外の名詞：「者（人物）」「君達」「殿原」「東国の勢」／形式名詞：「コト」「ヨシ」／相対名詞･方向を示す名詞：「内」

感情･知覚を表す名詞：「めでたさ」「不思議さ」「恨み」

上記の分類は、Ⅰでは主に表現者の主体的な意思や感情を表すものとした。よって、助動詞接続ではない仮定条件をⅠの分類に加えた。

文脈の解釈はテキストに従う。用例の所在は(頁　巻名　部　巻数／テキストの巻(①･②))で示し、他資料は資料名・頁・巻名を併記する。

本調査では、以下の点に注目して用例を見ていく。

1　移動の生起時と終了時：事態の生起と終了が、発話時以前・以後のいずれであるか。発話時以前を過去、発話時以後を未来として判別する。

2　移動終了地における主体の存在　：移動終了の場所が主体の存在場所となるものを存在に繋がる用例として捉える。

本調査で目標とするのは、高野本『平家物語』における「へ」と「に」における「方向」と「帰着点」との関係を明らかにすることである。本来の「へ」と「に」は、「方向」と「帰着点」という違いが説明されるが、高野本『平家物語』における「へ」と「に」の違いと「方向」、「帰着点」と関与が認められるのかについて検討する。

構成は以下の通りである。次節の第 3 節では、高野本『平家物語』の「へ」と「に」の用例について、動詞の活用形や助動詞接続などを指標として両助詞の表された表現形式を分類する。その中で「へ」への偏りが顕著な用例を取り上げ、その意味内容により「へ」と「に」の違いを検討する。第 4 節では、前節の結果をもとに、平安時代から室町時代までの資料における「へ」と「に」の出現傾向を通覧し、時間表現と意味内容について検討する。第 5 節においてまとめと今後の課題を示す。

4．高野本『平家物語』における「へ」と「に」

4.1. 動詞出現形の概観

移動動詞との共起において、助動詞、助詞の接続を手掛かりに表現内容[注3]を分類すると、「へ」と「に」の出現には違いが見られる。以下に示した表は「へ」と「に」の出現形の別に纏めたものとなる。カッコ内の比率は、各分類における「へ」と「に」の数値

比率を示す。

表１　移動動詞と共起する「へ」ち「に」の分類別用例数

	過去完了	非･過去完了	無標
「へ」	176（83.8%）	98（91.5%）	326（61.8%）
「に」	34（8.4%）	9（8.4%）	201（38.1%）

表によると「へ」と「に」とでは全体的に「へ」が上回るが、両助詞の差異が顕著であるのは非・過去完了の類となっている。であることが分かる。特

更に上記の内訳として見た場合、その偏りも表現の形式によって異なることが見て取れる。

表２　非過去完了（単独形）の「へ」と「に」

	表現型式(内容)		「へ」	「に」
非・過去完了	否定	助動詞：ズ	13	3
	推量	助動詞：ジ･マジ･ム･ムズ ベシ･ラム･ケム	41	5
	願望	助動詞：タシ 助詞：バヤ	9	
	仮定	助詞：バ（＋未然形）	4	
	疑問	疑問詞：イヅク･イヅチ イズレノ･ドノ 助詞：カ	17	1
	伝聞	助動詞：ナリ	2	
	命令	動詞：命令形	12	
過去完了	過去	助動詞：キ･ケリ	112	13
	完了	助動詞：ヌ･タリ･リ	64	21
無標	―	動詞：終止形･連用形 その他	326	201
	合　計		600	244

上記の表では「希望」「伝聞」「仮定」「命令」では全て「へ」のみで現れている。これらの用例には、特徴として「発話」として表されたものが多いという点がある。発話表現においては、表現がなされた時点を基準として、事態の生起と完了が発話の時点より以前の過去であるのか以後の未来であるのかという点に注目した上で､用例を見て行く。「発話」としての判別は、コーパスの「文種」における「会話」と、引用の「～と」の内容として示された用例である。

以下より、出現数の偏りが「へ」と「に」の違いに繋がるものであるかを検討するた

め、具体例を見て行く。

4.2.「へ」のみが確認される用例―願望・伝聞・仮定・命令

Ⅰ　「願望」

以下では、清盛からの追伐を逃れるための都落ちを決意した義経が自身の未来時に向けての願望を述べる場面である。発話の内容には、実現していない事態の未来時における実現の願望が表される。

(1) 頼朝、郎等共が讒言によッて、義経をうたんと仕り候間、しばらく鎮西の方へ罷下らばやと存じ候。(455 判官都落 12②)

(頼朝は郎等たちの讒言によって、義経を討とうといたしますので、しばらく九州の方へ下りたいと存じております。(同頁・訳)

Ⅱ　「伝聞」

以下の用例は、義経が頼朝に敵対するとの讒言を聞き入れた頼朝が、義経を鎌倉に入れないために、大名たちに対して発した言葉である。義経が鎌倉に来るとの情報を伝聞の内容として示している。

(2)「今日九郎が鎌倉へいるなるに、おの＼／用意し給へ」と仰せられければ、大名小名はせあつまッて、ほどなく数千騎になりにけり。(416 腰越 11②)

(「今日、九郎が鎌倉へ入るそうだから、めいめい用心なされ」と仰せられたので、大名小名は馳せ集まって、間もなく数千騎になってしまった。(同頁・訳))

Ⅲ　「仮定」

仮定の条件表現[注4]には「バ」「タラバ」の二つの形が確認される。いずれも発話の時点では実現されていない事態、という点で共通する。

「タラバ」では都落ちをしようとする平氏一門に出会った貞能が、都落ちを引き留めようとする場面である。後件には西国に下った後の残念な状況が表される。未来時における完了した事態を仮定として示す。

(3)　西国へくだらせた給ひたらば、落人とてあそこここにてうちちらされ、うき名をながさせ給はん事こそ口惜しう候へ。(88 一門都落 7②)

(西国にお下りになったらば、落人ということで、あちらこちらでうち散らされ、悪い名をお流しになるだろうという事が残念です。(同頁訳))

「バ」では、鼓判官が木曽に対して法皇への降参を勧めるが、それは人を陥れるための悪だくみだとの考えを示し、降参を強く拒否する。その仮定の内容として、実現することのない架空の事例が表される。

(4) 大臣家や宮々の御所へも参らばこそ僻事ならめ、是は鼓判官が凶害とおぼゆるぞ。(143 鼓判官 8②)

(大臣家や宮々の御所にも参るというのなら不都合なことだろうが、どうもこれは

鼓判官の人を陥れる悪だくみだと思われるぞ。(同頁訳))

Ⅳ 「命令」

次の用例では、出家した維盛が自身の最期を八島へ伝えるという自身の望みとその方法を言い含めた事態の、未来時における実現を指示する。

(5) 舎人武里を召して、「おのれはとう＼／是より八島へかへれ。都へはのぼるべからず。(306 維盛出家 10②)

(舎人武里を呼んで、「お前はさっさとここから八島へ帰れ。都へ上ってはならぬ(同頁訳))

4.3.「へ」と「に」が表される用例

「へ」と「に」とのいずれにも確認された否定、推量、疑問の具体例を以下に示す。

Ⅴ 「疑問」

「疑問」では「へ」と「に」のいずれにも確認されるが、両者の違いとして、事態の生起した時と主体の所在という点で異なる。

以下「へ」の用例では、流罪地へ流される前の新大納言成親が移動の終了地点を疑問として表す。

(6)「こはいづちへとて行くやらん。二度故郷に帰って妻子を見ん事もありがたし。(略)」と、天にあふぎ地にふして、泣きかなしめどもかひぞなき。明けぬれば既に舟おしいだいて下り給ふに (148 大納言流罪 2①)

(これはどちらへ行くのだろう。再び故郷に帰って妻子に会うこともむずかしい。(略)と、天に仰ぎ地に伏して、泣き悲しんだが、なんともしかたないことであった。夜が明けると、早くも船を押し出して下っていかれたが(同頁訳))

一方「に」は、現時点での不在の人物について、その移動終了地を疑問とする。現在は既に不在の状況にあることから、移動という事態は発話以前に生起した事態捉えられる。

(7) 宮のご在所は、いづくにかわたらせ給ふらん、知り参らせ給はず。たとひ知り参らせても、さぶらひほんの者の、申さじと思ひきッてん事、糾問におよンで申すべしや」とて、其後は物も申さず。(290 信連 4①)

(「高倉宮のおいでになる所は、どこにいらっしゃるのか存じ上げません。たとえ存じ上げておりましても、侍といわれる者が申すまいと決心したことを、糾問されたからといって申しましょうか」といって、その後は何も言わない。(同頁訳))

上記より前の文脈では、高倉宮を捉える目的で御所に押し寄せた官人に対し、対応に出た長兵衛が「御所でも候はず(p.287)」と宮の御所での存在を否定するという展開がある。上記で表された移動は現在以前の過去に生起した事態であり、疑問の対象となる場所は移動の終了地であると同時に、高倉宮の現在の存在場所となっている。

Ⅵ「否定」

Ⅵ―a　「否定」における「へ」

「否定」の「へ」の用例文は、全て係助詞「も」、副助詞「なんど」、助動詞「ごとし」等の共起によって表されるという共通点が見られる。それぞれの意味用法について、『日本文法大辞典』[注5]を参考にして、用例文それぞれを「類例の列挙」「類例の暗示」「例示」「比況」「反語」として分類されるが、いずれも直接的な断定を避けた間接的表現という点では共通するものとして捉えることもできる。このように捉えた「へ」の用例を数値的に纏めた表と具体例を以下に示す。

表３　「否定」における「へ」と「に」の分類

	類例暗示	類例列挙	例示	比況	反語	とりたて	その他	合計
分類の指標	も	も	なんど	ごとし	いかでなどか	は		
「へ」	5	3	1	1	3			13
「に」	1					1	1	3

ⅰ　類例の暗示

（8）昌俊畏ッて承り、宿所**へも**帰ら**ず**、お前をたッてやがて京へぞ上りける。（449 土佐房被斬 12②）

ⅱ　類例の列挙

（9）『しばしもあらば、暇こうて参らむ』といひしかども、廿日にあまるに、あれ**へ**も**ゆか**ず、是**へも**見えず。（471-472 六代 12②）

ⅲ　例示

（10）狩、漁なンどのやうに、足だちのよからう方**へ**はむかはん、あしからう方**へ**はむかは**じなンど**候はんには、いくさに勝つ事よもあらじ。（201 老馬 9②）

ⅳ　比況

（11）蘇子卿が故国にとらはれ、李少卿が漢国**へ**帰ら**ざり**しが**ごとし。**（132 瀬尾最期 8②）

ⅴ　反語

（12）千はやふる神にいのりのしげければ**などか**都**へ**帰ら**ざる**べき（175 卒塔婆流 2①）

Ⅵ－b「否定」における「に」

一方「に」にも「も」との共起例が 1 例確認されるが、その他には「は」との共起例 1 例と「～ぬさきに」の形で表される用例 1 例がある。

ⅱ　類例の暗示

（13）さる程に、法皇都の内**にも**わたらせ給は**ず**と申す程こそありけれ、京中の騒動

なのめならず。(64 主上都落 7 ②)

vi とりたて

(14) 御乳人なンどが心をさなう具し奉ッてうせにけるにや、まッたく此御所**には**わたらせ給は**ず**」と仰せければ (330 若宮出家 4①)

vii 定まった一枠組み

(15) なぎさ**に**つか**ぬさきに**、馬どもおひおろしおひおろし、舟にひきつけひきつけ (343 勝浦付　11②)

上記を[**vii 定まった一枠組み**]として捉えたが、その根拠は「(打消し) ＋さきに」の形で表される例が、軍記物語では同資料に 5 例、『保元物語』2 例、『平治物語』1 例に確認されたことによって、一形式に定めたものである。

【類例】 平家物語：

「他人の口よりもれぬ先に」(107 西光被斬 2①)

「舟に乗らぬ先に」(145 大納言流罪 2①) ／「勢のつかぬ先に」(393 富士川 5①)

「物を思はぬさきに」(274 請文 10②) ／「いまだ終らざる先に」(406 競 11②)

保元物語：「天の明けざる先に (254 上) (264 上)

平治物語：「夜の明けぬ先に」(440 上)

Ⅵ－c 「へ」と「に」が表された「否定」

係助詞「も」との共起例は、「へ」と「に」のいずれにも確認される。これは、移動が現在の状況として表されているか、過去に生起した事態として捉えられているかの違いによるものと考えられる。「に」は、主体の移動のみを対象とした表現であり、しかも主体の不在が御所内で発覚した後の状況を表している。これは、主体の移動が騒動となった現在よりも前の過去の事態を対象として捉えられていることを示している。一方、「へ」は、周囲の状況を含めた主体の移動を含む一連の流れとともに表される。

(16) さる程に、法皇都の内**にも**わたらせ給は**ず**と申す程こそありけれ、京中の騒動なのめならず。(64 主上都落 7 ②)

(さて、法皇が都の内にいらっしゃらないと申すや否や、京全体の騒ぎはひととおりではない。(同頁訳))

(17) 舟も漕ぎかくれ、日も暮るれども、あやしのふしど**へも**帰ら**ず**、浪に足うちあらはせて、露にしをれて其夜はそこにぞあかされける。(194 足摺 3①)

(船も遠ざかって水平線から隠れ、日も暮れたが、そまつな寝所へも帰らず、波が足を洗うにまかせて、夜露にぬれてしょんぼりと、その夜はそこでお明かしになった。(同頁訳))

上記の用例において、「に」は過去に生起した事態を対象とした表現に用いられているが、「へ」は現在の事態を対象とした表現に用いられている。以上の「へ」と「に」の用例

には、表現対象が過去の事態を捉えたものであるか、現在の事態を捉えたものであるかという違いが見て取れる。

Ⅶ「推量」

推量の助動詞は「不確実なことを推測したり、未来・現在・過去にわたる事柄を想像したりする意を表わす助動詞（日本文法大辞典 p.345)」と説明される。本調査では、「ジ」「マジ」「ム」「ムズ」「ベシ」「ラム」「ケム」の助動詞の接続した移動動詞が対象となる。「～と」「～とて」の引用表現を通じて、これらの助動詞の接続により話し手の意志や予測、心情が表された内容に表された用例が確認される。

Ⅶ－a　「推量」における「へ」

まず、「へ」の用例を見て行く。以下に示した表は、「へ」が表された「推量」の用例が、どのような文種に表わされているかを示したものである。表中の「会話」は、コーパスにおいて、「本文種別」が「会話」として分類された用例を示す。表中の項内に示した「「と」「とて」」は「～と」、「～とて」に引用された内容である用例を示し、「手紙」は、手紙（書簡）の中で表わされた用例、「名詞句」は移動動詞が名詞句に接続する用例、「その他」は発話動詞以外の動詞が「～と」に続く用例や、「ムとす」「ムズ」の形を取る用例を含めたものを示す。

表４　「推量」における「へ」と「に」の内訳

分類	会話	「と」「とて」	手紙	名詞句接続	その他	合計
「へ」	23	4		9	5	41
「に」			2	2	1	5

「へ」では全体の半数以上が会話で表されるが、この傾向は名詞句接続においても確認される。その用例には以下のような用例が挙げられる。

名詞句「心のうち」に接続する用例（3 例）や、「よし」との接続の後に発話を表わす動詞が続く用例（５例)、そして「～と」「～とて」の後に続く動詞に発話や発話に関わる動詞が 3 例確認される。

①　名詞句「心のうち」に接続する用例

（18）いつしか又関の東へおもむかれ**けん心のうち**、おしはかられて哀れなり。（283 海道下 10②）

【類例】:「心のうち」（98 座主流 2①）（213 少将都帰 3①）

②「よし」に接続し、発話に関わる動詞が続く用例

（19）平家追討のために西国へ発向**すべきよし奏聞す。**（160 生けずきの沙汰 9②）

【類例】:「奏聞す」(193 三草勢揃 9②)「宣ふ」(150 阿古屋之松 2①)
「聞こゆ」(445 飛脚到来 6①)(195 三草勢揃 9②)

③「～と」「～とて」の後に発話に関わる動詞が続く

(20) いかにもして、漢朝へ帰らんとのみなげけども、胡往ゆるさねばかなはず
(181 蕪武 2①)

【類例】:「聞こしめす」(63 主上都落 7②)／「祈誓す」(369 鵜合檀浦合戦 11②)

上記の用例を合わせると、発話や心中の表現に用いられた「へ」は、「推量」の「へ」全用例の半数以上 34 例(約 82%)になる。これらの用例で表された内容は、表現がなされた現在、及び以後の未来時の事態を表すものとなっている。

Ⅶ－b 「推量」における「に」

「に」に「会話」は含まれず、「手紙」の 2 例が確認される。

(21) 清盛入道、尚凶器をおこして、貴寺に入らんとするよし、ほのかに承り及ぶをもって、兼ねて用意をいたす。(307 南都牒状 4①)[手紙]

上記の牒状に関しては、「もとは漢文であったもの(302 頭注)」とされる。(以下、『平家物語全注釈』において、書簡として示された漢文の一部を示す。)

清盛公尚 聞(ヲコシテ) 勇気ヲ欲(スヲ)入(ソト)貴寺ニ由(シ) 風(ホノカニ) 以テ承及ヲ兼テ 致(イタス)用意ヲ
(『平家物語全注釈』上巻 p.596 参考)

上記により、「へ」が用いられる場合には、主体の現在から未来への事態を発話や心中内容を表現するが、「に」は既知の事態を客観的に捉え、記述するという異なる表現の場に用いられていることが確認される。

高野本『平家物語』において、移動動詞と共起する「へ」と「に」について述べたことは以下のようになる。

1. 出現傾向の概観

移動動詞と共起する「へ」と「に」には、共起表現の種類によって出現数に偏りが認められる。特に、表現対象となる事態が現在の時点で未実現である場合には、「へ」が優勢に用いられる傾向が見られる。

2. 「へ」の用法と未実現性の関係

「命令」「希望」「仮定」など、話者の意志や仮想的状況を表す表現においては、「へ」のみが用いられている。これらの表現は、いずれも事態が現実化していないことを前提とするため、方向性を示す「へ」が適合するものと考えられる。

3. 両助詞が併存する表現領域

「否定」「推量」「疑問」では、「へ」と「に」の両方の用例が確認される。

3.1 疑問における「へ」と「に」

移動の目標が未確定な場合には、主に「へ」が表される。
一方「に」が表されるのは、過去に生起し、移動の完了した事態である。
移動目標、主体の存在のいずれもが不明の場合には、方向を主とした表現であるため、「へ」が表される。一方、移動の終了場所が主体の存在に繋がるものには、存在を表す「に」が用いられるのだと考えられる。

3.2 否定における「へ」と「に」

「へ」が表現に用いられる場合、以下のような間接的な表現形式が多く見られる

類例の暗示・類例の列挙・例示・比況・反語

これらは、断定的な否定を避け、婉曲的に事態の不成立を示す。「へ」方向性のみを表すもので、完了の事態を表すものではないために、そのような間接性を有する表現に用いられることが考えられる。

3.3 推量における「へ」

推量表現において「へ」が用いられるのは、主に発話主体の心中や思考を表す文脈である。すなわち、事態が不確実であり、結論に至っていない段階での事態の経過や方向性を示す場合に、「へ」が選択される傾向がある。

以上、高野本『平家物語』における移動動詞と共起する「へ」と「に」の用法には、表現の確定性や間接性と深く関わる用法の差異が認められる。つまり、「に」と異なる「へ」の特徴として、未実現の事態や間接的な否定、推量的な方向性を表す際に用いられる傾向が強い。一方「に」は、完了した事態、確定的な存在を表す傾向が強い。この違いは、文法的機能とは異なる意味用法上の一端を担っていると捉えられる。

次節では、高野本『平家物語』前後の資料について、助動詞接続を指標として、「へ」と「に」に確認される表現の意味内容を見る。

5．上代～中世における助動詞と表現形式の関係

以下、時代を追って、「へ」と「に」における助動詞と表現形式の関係を見て行く。対象とする表現形式は「否定」「推量」「願望」「疑問」「仮定」「命令」と、高野本『平家物語』では抽出されなかった「マシ」を加える。用例数の少ない「伝聞」は、「その他」に含めて計上する。高野本『平家物語』にて「へ」への偏りが顕著な表現形式を纏めたものが以下の表となる。表中の「○」は、ツ・ヌ・タリの接続のない用例を示す。ナム・ナバヤ・ナバなど、ヌの接続形は●、タラム・タラバ◆、ナラバ◇、タナラバ■、テム▲を示す。

表の説明：時代の区分はコーパスの時代編を記述する。表右に示した数値は、表現形式によって分類した用例数を示したものでⅠ否定、推量などの合計数、Ⅱ過去、完了の助動詞の接続する用例、Ⅲ無標の用例数と（伝聞ナリ接続や終助詞ゾ）の接続形などの 2

例以下の用例数のものを含めた用例、それぞれの合計数を示す。平家物語の数値は、動詞単独形のみの対象としたものであるため、前節で示した数値とは異なる。

表５　中古における「へ」の助動詞接続と表現形式

	意味	否定	推量								希望	仮想	仮定	命令	疑問	対象の合計	過去完了	無標 その他
	分類の指標	ズ	ジ	マジ	ム ナム テム	ムズ゛	ラム ヌラム	ケム	ベ゛シ ヌベ゛シ	メリ ヌメリ	マホシ	マシ ナマシ	バ゛ ナバ゛	命令	疑問			
「へ」	平安時代																	
	竹取	○				○										4	3	1
	伊勢	○			○●	○										4	6	7
	土佐																	5
	大和	○			○				○							3	5	4
	平中	○			○											2	9	3
	蜻蛉				○●											5	1	3
	落窪				○●				○					○		3		2
	枕					○			○							2	5	17
	和泉	○														1		
	源氏	○		○	○				○						○	22	11	16
	紫																	1
	堤		○		●		○									5	2	
	更級								○							1	1	3
	大鏡	○			○					○				○		8	2	9
	讃岐	○														1	2	1

表６　中古における「に」の助動詞接続と表現形式

	平安時代																	
「に」	竹取				○			○●								3	3	4
	伊勢																4	3
	土佐																	1
	大和																11	14
	平中								●							1	5	9
	蜻蛉	○		○					●						○	4	17	8
	落窪	○		○	○				○					○		9	9	14
	枕	○								○						3	19	31
	和泉	○							○							2		3
	源氏	○	○		○				○		○		●		○	31	36	66
	紫																	3
	堤	○									●					2		2
	更級	○														1	3	6
	大鏡	○			○							●	●	○		7	22	34
	讃岐							○						○		1	2	3

表を通覧すると、平安時代における「へ」と「に」と比較した場合、「へ」では完了の助動詞を伴う用例は少ない。「へ」の用例に確認される「ナム」では、未来時に向けての意思や希望が表される。

（22）夜ひと夜、酒飲みしければ、もはらあひごともえせで、明けば尾張の国へたち**なむ**とすれば、男も人しれず血の涙を流せど、えあはず。（伊勢物語 174）

（一晩中、酒宴を催したので、まったく逢うこともできず、夜が明けると尾張の国へ出立する予定なので、男も心中悶々として、ひそかに血の涙を流すが、逢えない。（同

頁訳))

(23) 錦を着てとこそ言へ、古里へも帰りなむと思ふ。(蜻蛉日記 171)

(「錦を着て」という言葉とはちがうが、いっそ「故郷」のもとの家へ帰ってしまいたいと思う。(同頁訳))

(22) では、夜が明けた時の予定として表されていることからも、現在より後の未来の事態を表わしたものと理解される。(23) は「〜と思ふ」の引用内容であり、未来に向けての主体の希望の意が表されたものと捉えられる。とすると、平安時代において完了の意を示す用例は「に」に偏るという点はいえるようである。

表７　中世における「へ」の助動詞接続と表現形式

	意味	否定	推量										願望		希望	仮想	仮定			命令	疑問	対象の合計	過去完了	無標
	分類の指標	ズ	ジ	マジ	ムナムテム	タラム	ムズ゛	ラムヌラム	ケム	ベシヌベシ	メリヌメリ		バヤナバ゛ヤ	タシ	マホシ	マシナマシ	バ゛ナバ゛	タラハナラバ゛	タナラバ゛	命令	疑問			その他
「へ」	今昔	○	○	○	○●		○	○		○			○				●			○	○	64	43	61
	方丈記																				○	1		
	宇治	○	○		○		○	○		○										○	○	28	46	64
	十訓	○			○●												○			○	○	14	28	22
	徒然	○								○										○	○	7	9	6
	海道									○												1		
	建礼	○								○												2	3	8
	東関				○					○							○					3	2	4
	十六夜									○												1	2	4
	とはず									○												20	29	47
	保元	○			○▲		○		○	○			●							○	○	32	19	24
	平治							●					○				○●				○	11	34	38
	平家	○	○	○	○		○	○	○	○			○	○			○	◆		○	○	97	183	327
	室町時代																							
	狂言集	○		○	○		○						○	○			○	◆		○	○	348	84	475
	㈝平家	○		○	○		○			○			○				○	◇◆		○	○	47	72	152

表８　中世における「に」の助動詞接続と表現形式

「に」	鎌倉時代																							
	今昔	○		○	○●	◆	○	○●		○						●	○●	◆		○	○	113	490	1082
	方丈																							
	宇治	○			○			●		○						●				○		17	63	96
	十訓				○				○	○												6	14	43
	徒然																						3	5
	海道																							
	建礼	○																				1	1	2
	東関								○													1	2	4
	十六																							
	とはず																						15	14
	保元																				○	1	2	27
	平治	○																			○	2	10	15
	平家	○			○		○		○												○	9	31	146
	室町時代																							
	狂言集				○															○		5	19	31
	㈝平家				○													■			○	8	24	66

鎌倉時代では、平安時代に見られなかった「へ」において「願望」や「仮定」の「ヌ」や「タリ」を伴うも見られる。一方「に」では平安時代よりその表現も少なく、宇治拾

遺物語以降は「仮定」や「願望」などが見られなくなる。全体として平安から鎌倉にかけては「へ」の増加傾向と「に」の減少傾向が見て取れる。

以下、高野本『平家物語』と異なる点を中心に具体例を示す。

5.1. 上代

『万葉集』では「へ」と「に」のいずれにも「仮定」の用例が確認される。この用例における「へ」と「に」を比較すると、「に」では「妹に逢ふ」という具体的な目的が示されるのに対し、「へ」ではそのような目的は示されない、という点が挙げられる。

〈「に」の用例〉

(24) あしひきの　山飛び越ゆる　雁がねは　都**に**行か**ば**　妹に逢ひて来ね　(3687)（巻第 15）

安思必奇能　山等妣古由留　可里我祢波　美也故尓由迦波　伊毛尓安比弖許祢

（山を飛び越える　雁がねよ　都に行くのなら　妻に遭って来ておくれ）

〈「へ」の用例〉

(25) 天**へ**行か**ば**、汝がまにまに　地ならば　大君います　(800)（巻第五）

阿米弊由迦婆　奈何麻尓麻尓　都智奈良婆　大王伊麻周

（天へ行ったら　勝手にすればよかろうが　地上には　大君がいらしゃるのだぞ。同頁訳）

上記の「へ」では、上接名詞句が「天」となっており、先行研究にて明らかにされている「へ」の「広く漠然とした場所」を指すという特徴に繋がる。この点が「へ」の用例に繋がったものと考えられる。

5.2. 中古

〈「に」の用例〉

Ⅰ　「希望」

「希望」では、行動を思い留まった状況と、その後の現在が示される。前件に拘束されない後の状況が表されていることから、「に」で表された上記の「願望」は過去の事態として捉えられる。

(26) 大将は、御ありさまゆかしうて、内裏**に**も参ら**まほしく**思せ**ど**、うち棄てられて見送らむも人わろき心地したまへば、思しとどまりて、つれづれにながめゐたまへり。(源氏物語 92 賢木)

(大将は。斎宮葉娘もご出立の議をご覧になりたくて、ご自身も宮中には参上したくお思いになるけれども、うち捨てられた形で見送るというのも、不体裁な感じなので、お思いとどまれて、所在なく物思いに虚けていらっしゃる。(同頁訳))

Ⅱ　「疑問」

以下は、不在であった大夫（道綱）が帰って来た折に、これまでの移動先の場所を兼家が尋ねる場面である。

（27）（大夫）とばかりありて来ぬ。「大夫はいづこ**に**いき**たりつる**ぞ」とあれば、とかう言ひ紛らはしてあり。（蜻蛉日記 285）

（どうしようもないと思っているうちに、しばらくして一行が帰ってきた。「太夫はどこに行っていたのだ」と尋ねるので、適当にごまかしている。（同頁訳））

Ⅲ 「仮定」

次に示す用例では、源氏が若紫が父宮に邸に移ってしまった後の完了した事態を仮定した内容となっている。

（28）かの宮**に渡りなば**、わざと迎へ出でむもすきずきしかるべし、幼き人を盗み出でたりともどき負ひなむ（源氏物語 252 若紫）

（あの父宮の邸に移ってしまったら、わざわざこちらに迎え取るとしても、好色がましいことになろうし、年端もいかない女の子をかどわしたとて非難もされもしよう。（同頁訳））

Ⅳ 「命令」

「命令」では、いずれも上接名詞句として代名詞「ここ」「こなた」「かしこ」を取り、言語主体の方への移動が表される。

（29）辱なくとも、**ここに**わたらせたまへかし。（落窪物語 323）

（恐れ多いことですが、母上がこちらへお出かけくださいませ。（同頁訳））

【類例】 同資料の命令表現：こなたにもわたりたまへ（同 254）

かしこにもわたりたまへ（同 298）

青木（1956）では、「言語主体の方に進み近づく意を表す動詞「来」「来タル」にかゝる例、が僅かながら現れる（p.113）」のは『今昔物語集』であり、「言語主体に最も近い関係を示す代名詞「ココ」「コナタ」等が現れる（p.113）」ことが明らかにされている。この点を考え合わせると、上記の「に」による命令は、「へ」の拡張以前であることが背景にあったのではないかと考える。

5.3. 中世前期

〈「へ」の用例〉

「へ」では確認されなかった「願望」、疑問詞による「疑問」、「仮想」が鎌倉時代には確認される。

1「願望」

『今昔物語集』では、未実現の事態の実現を望む表現が「へ」の用例として確認される。未実現の事態を対象とする点で、高野本『平家物語』と共通する。

（30）「然云ラム所**へ**行カム**バヤ**」ト思フ心深ク付テ（今昔物語集 451・30）

（無性に城下という場所に行ってみたくなり、（同頁訳））

Ⅱ「疑問」

『今昔物語集』では疑問詞による「疑問」が確認される。その中には過去に生起した事態を対象とした用例も見られる。

以下の用例は、外出して帰ってきた人物に対して、「どこへ行っていたのか（同頁訳）」と、現在より前に生起した事態について移動した場所を尋ねる。このように過去に生起した事態を対象とする「疑問」は、平安時代資料では「に」の用例として確認されたものである。

（31）或時出でて帰り来たるを、法印、「いづくへ行きつるぞ」と問ひしかば（徒然草152）

（ある時、外出して帰って来たので、法印が、「どこへ行っていたのか」と聞いたところ（同頁訳））

このような疑問詞における「へ」の用例について、石垣（1955）では、『源氏物語』は古典全集本に依ると「何方へか消え失せにけんと（須磨、250頁）も河内本では「へ」が無い（p.67）」として、これは「「いづち」といふ體言は必ずしも格助詞を介せずに用言へ直接する性質があるから、河内本の方が正しい形と考へる事も出來る（同頁）。」と述べられている。とすると平安時代の移動動詞と共起する用例を見た場合、「へ」では疑問詞をとる用例が確認されなかったが、『今昔物語集』以降には確認されるようになったことは、「へ」の用法拡張によるものして捉えることもできるのではないだろうか。

Ⅲ「仮想」

事実に反することを仮想する表現に「へ」が確認される。表現としては、これまでに見られなかった用法であるが、意味としては未実現の事態を対象とした表現であり、高野本『平家物語』における「へ」に繋がる用例として捉えられる。

（32）「御堂の内へ入らましかば、触穢ありなまし」と自讃せられけり。（十訓抄 76）

（そのまま御堂の中へ入ってしまったならば、穢れにふれることになっただろう）とご自賛なさったということである（同頁訳））

〈「に」の用例〉

Ⅳ「疑問」

（33）「父はいづくに渡らせたまふぞ。只今参るぞや。待たせたまへや」（保元物語359下）

（父はどこにいらっしゃるのか、ただ今参りますぞ。お待ちください（同頁訳））

上記の用例は、乙若殿の弟たちが、処刑直前の時点で亡父に向けて発した言葉である。父は既に死亡した状況にある。その亡き父は西山に所在するのだということを兄の乙若殿から知らされているため既知の場所を対象とした疑問である。この用例は、現在以前の過去に生起した事態であり、疑問の対象が現在の存在場所となるという点で高野本『平

家物語』に通じる用例として捉えられる。

5.4. 中世後期

『天草版平家物語』では、「タラバ」と「タナラバ」が「へ」と「に」との違いとして表される。この場合、「へ」で表された「タラバ」では未来時の事態が表されるが、「に」では過去の事態が表される。

〈「へ」－タラバー　の用例〉

（34）西国へ落ちさせられ**たらば**、助からせられうと思し召すか（天草版平家物語 191 巻第 3 第 8）

参考として、上記と同じ場面の高野本『平家物語』の訳を見ても、未来時における行動を対象とした表現であることが確認される。

（35）西国へくだらせ給ひ**たらば**、落人とてあそこここにてうちちらされ、うき名をながさせ給はん事こそ口惜しう候へ。（高野本平家物語 87-88）

（西国にお下りになったならば、落人ということで、あちらこちらで討ち散らされ、悪い名をお流しになるだろうということが残念です（同頁訳））

一方、「に」で表された「タナラバ」は、過去の事実と異なることを仮定して述べる。

〈「に」―タナラバーの用例〉

（36）足柄山を討ち越いて八か国に入らせられたならば、畠山の一族などわこなたえ参らいでかなうまい（天草版平家物語 151 巻第２-10）

（37）足柄の山こえて八ヶ国へ御出候はば、畠山一族、大庭兄弟などか参らで候べき（高野本平家物語 401　5①）

（足柄の山を**おいでになっておられたら**、畠山の一族や大庭兄弟がどうして参らぬはずがありましょうか、（略）後悔したけれども、今さらしかたがない。（同頁訳））

以上、平安時代から室町時代における「へ」と「に」の用例について述べたことは次のようになる。

『万葉集』では、「仮定」として「へ」と「に」のいずれにも用例が確認される。この場合の「へ」は「言語主体から遠く離れた場所を漠然と指すという「へ」の特徴を以って表される。

平安時代において、「へ」では「願望」や「命令」は確認されない。一方「に」では「願望」「疑問」が確認されるが、これらの用例では、現在以前の過去の事態を対象とする。

『今昔物語集』以降、「へ」では、未実現の事態を対象とした「疑問」や、事実に反することを「仮想」する用例が確認される。

鎌倉時代において「に」が用いられる「疑問」は、過去に生起した事態で、移動の終了地が現在の存在する場所を表す。『宇治拾遺物語』以降「に」では「希望」「仮定」「疑問」は殆ど確認されない。鎌倉時代における「へ」と「に」の用法は、高野本『平家物語』に繋がる。

室町時代では、仮定表現において「ナバ」は見られなくなるが、「タラバ」「ナラバ」「タナラバ」などのこれまでに見られない形式が見られるようになる。この場合、「タラバ」「ナラバ」は「へ」で表されるが、「タナラバ」は「に」で表される、という違いがある。「に」で表された「タナラバ」は過去の事態を対象とするが、「へ」で表された「タラバ」「ナラバ」は未実現の事態を対象とする。対象となる語は鎌倉時代とは異なるが、「へ」と「に」の用法には鎌倉時代と異なるものは見られない。

6．まとめと今後の課題

本調査では高野本『平家物語』の「へ」に確認された表現形式を中心として、「へ」と「に」について調査を行った。

高野本『平家物語』における移動動詞と共起する「へ」と「に」は、表現形式による違いが認められた。「へ」は願望、仮定、疑問、命令の表現に表わされるが、事態が完了し、現在の存在が確認される疑問は「に」で表される。つまり、未実現の事態や未完了の事態の表現には「へ」が用いられるが、完了した事態には「に」が表される。これらは助動詞の意味内容とは関係なく、表現形式の違いによって異なるものであった。これは、事態が完了に至らず、事態の生起も不明な事態の表現は、方向性を表す「へ」によってのみ表現可能となる。ところが既に完了した事態で現在の時点で結果の確認が可能な表現には帰着点を表す「に」によって表現可能になる。ゆえに上記の表現形式の違いが「へ」と「に」の違いに繋がったものとして捉えた。

そこで中古期から中世期までの助動詞接続と、表現形式の関係を通覧すると、時代の経過により助動詞と表現形式の関係に変化が見られた。中古期において、「へ」は完了の意を含む助動詞の接続は見られず、「に」では完了の助動詞を接続する。この段階では、上記の表現形式に「へ」の使用は見られない。「に」においても、完了した事態で現在の時点で存在が確認される用法に見られるものであった。中世期には「へ」にも完了の意を含む助動詞の接続が見られるようになるが、表現形式として未実現の事態や未完了の事態に限られたものであった。一方の「に」では完了した事態で現在の存在が確認される事態にのみ用いられる。その後には完了した事態であっても、表現形式として未実現や未完了の事態の表現が前提となる表現形式は「へ」によって表される。

つまり、「へ」と「に」における方向と帰着点の違いは、一気に見られなくなるのではなく時代の経過によって異なるものであった。それは、助動詞による違いから、表現形

式の意味内容による違い、そして意味内容とは関わりなく表現形式によって区別されるようになる。このような通史的過程はあるものの、これは「へ」と「に」の方向性と帰着点の違いに基づくものであった。高野本『平家物語』における「へ」と「に」の違いは、通史的な拡張における一端を表わしたものとして捉えられるのではないかと考えたものである。

この点を含め、「へ」の用法を明らかにするためには調査対象を広げた上での詳細な調査が必要である。時代の異なる平家物語諸本の調査を含め、今後の課題としたい。

［注］

（１）現代日本語における名詞の特質として、「場所性」と「場所化」について論じられたものとしては田窪(1984)が挙げられる。そこでは「場所」に対する概念が言語ごとに異なることを他国語との比較によって示し、日本語の「場所」表現の実態を詳細に分析する。その中で日本語では名詞そのものが場所性を有するか否かによって明確な分類があることを明らかにされ、場所名詞は大きく４つに分類されるとして以下の用例を挙げられた。

本調査では上記の分類を参考として、以下のように分類した。

〈場所性の名詞としたもの〉

① 土地・場所を表す名詞 ;(国名・地名)(自然物)京、山、川原、海山、
② 建造物・その一部を表す名詞； 邸、殿上、局、曹司、僧坊、堂，…
③ 相対的位置関係や方向を示す名詞； 西、東、後、前、傍，‥

上記に含まれない語を以下の様に分類する。

⑤ 形式名詞； ところ もと あたり
⑥ 代名詞（前後文脈により地名や場所を示すと捉えられる） 此処、是…

〈調査の対象外としたもの〉

⑦ 事物を示す名詞；車、船…

⑦については可能な範囲での判断として、寺村（1992）にならい、「実質性」「モノ性」についてはプラスであるが「トコロ性」についてはマイナスと考えられる名詞とする。代名詞において、「後」「前」など順序と位置関係とのいずれかの判断が難しい場合、前後文脈にて位置関係を示す語である可能性があるものは用例に加えた。

本調査において対象とした用例を現代語と等しく行うことには問題もある。しかし田窪（1984）は中国語、朝鮮語、英語など諸言語間における日本語の本質を捉えた研究であり、基本的な基準を踏まえた上であるならば、参考とするこ

とも可能だと考えた。

（２）調査では、まず「へ」の用例として、短単位検索の語彙素読み「へ」、品詞の中分類が助詞－格助詞の条件を以て検索する。次に、抽出した動詞をキーとして、短単位検索の語彙素「対象動詞」、品詞の大分類が動詞、後方共起条件をキーから１～５語、語彙素読み「ニ」、品詞の中分類が格助詞、という条件で検索する。複合語は、「へ」の検索結果に抽出された複合動詞の前項、もしくは後項をキーとして、短単位検索　語彙素［各動詞］、品詞の大分類が動詞の条件によって検索する。抽出された複合動詞の中から「へ」の複合動詞と同じ語形で「に」と共起する語を選出する。

「に」のみ認められた動詞、「御―あり」「御―なす／なる」の形で表される「行啓なる」「還御あり」などや、「下着」のようにサ変動詞「す」に接続がない漢語のみで表される語は対象外とする。

高野本『平家物語』において抽出された動詞（複合形・漢語）を以下に挙げる。語形はコーパスにて抽出されたそのままの語形を示す。

あくがれ行く・あゆませ行く・あゆみ出でる・行きとほる・行きむかふ
出で立つ・打出でる・打入る・うちこえる・打越す・うったつ・おき出でるおしわたる・落ち行く・おち入る・おり下る・かいて帰る・帰り入る
帰りのぼる・帰り参る・かけ入る・具して行く・具して参る・下りつく
こぎ出でる・さげて参る・さげもて行く・さし入る・しざり入る・攻め入るせめのぼる・立入る・立ち帰る・たづね行く・尋ね下る・飛び入る
とびのぼる・飛んで入る・逃げ出でる・逃げさる・にげのぼる・のぼりつく馳せ入る・馳せ下る・馳せのぼる・馳せ参る・馳せ向ふ・はしり帰る・参り向ふ・罷下る・まぎれ入る・まよひ行く・まろび入る・乱れ入る
やぶり入る・やって行く・ゆられ行く・わって入る・ゐて参る
〔漢語サ変動詞〕発向す・下向す・乱入す・退散す

（３）用例の意味分類：動詞の直後に続く助動詞・助詞、及び名詞を指標とする。

意味の判別は、『日本文法大辞典』、『日本語文法大辞典』に従うが、複数の意味が記述されている場合は、テキストの頭注・訳、及び『平家物語全注釈』を参考に判別する。

推量の助動詞「らむ」は「現在の事に関して推量するもので、「む」よりも意味が強く、過去を推量する「けむ」とは対照的である（日本文法大辞典 p.904）」と説明され、「べし」は「肯定的で、論理性に基づいていうのが特色である（同書 pp.758-759）」としてそれぞれ異なる意味が説明されるが、「推量」と言う点は共通するため、これらの用例を「推量」の一類に含める。助動詞が重なる場合は動詞の下に続く助動詞を対象とする。「べからず」は「べし」の接続として

計上する。上接名詞句に疑問詞を取る用例は動詞が助動詞との接続形で表される用例は「疑問」として計上する。

具体例において、「けむ」と「らむ」は、「過去」と「現在」の違いによって表される。「らむ」は現在における推量を表わすが、「けむ」は「おしはかる」という心情の表された時より前の過去の事態に
おける推量が表される。

「らむ」：平家の君達たすけ舟に乗らんと、汀の方へぞおち給ふ**らむ**。（232 敦盛最期 9②）

「けむ」:いつしか又関の東へおもむかれ**けん**心のうち、おしはかられて哀れなり。（283 海道下 11②）

（４） 確定条件表現における「「へ」と「に」

本調査では、大きな分類として、赤塚・坪本（1998）にて表された「話し手（思考者）の主観的な心的態度」に繋がるものとして表現者の意思や感情による表現を想定し、それ以外を「事態そのままの表現」とによって分類した。よって、確定条件は表現者の意思や感情による表現には当たらないと捉えた。しかし、確定条件にも「へ」と「に」のいずれにも用例は確認される。そこで両助詞の用例を見ると、「へ」と「に」では異なる傾向が認められるようである。

小林（1996）では、「必然確定条件と偶然確定条件に分類される（小林 1996）が、この分類は、「へ」と「に」との違いにも反映する。高野本『平家物語』において、「に」では、条件句が原因・理由を表すが、「へ」では条件句が帰結句の事態の成立する単なるきっかけとなるものに表わされる。

〈「に」用例〉

以下の「に」(38) では、三位中将が日野におられた原因が条件句に表わされる。

（38）（三位中将）壇之浦にて海**に**いらせ給ひしか**ば**、もののふのあらけなきにとらはれて、旧里にかへり、姉の大夫三位に同宿して、日野といふ所におはしけり。（428 重衡被斬 11②）

（壇浦で海に沈まれたので、荒々しい武士に捕らえられて、故郷の京都に帰り、姉の大夫三位と同宿して、日野という所におられた（同頁訳））

（39）（高倉宮の皇子）後には嵯峨のへん、野依**に**わたらせ給ひしか**ば**、野依の宮とも申しけり。（333 通乗之沙汰 4①）

（後には嵯峨の辺、野依にいらっしゃったので、野依の宮とも申した。（同頁訳））

〈「へ」用例〉

「へ」では条件句の後の状況が後件句に表わされる。(40) では、君が西八条へ出た後、追捕の役人が来て、御内の人々をも含めて捕らえた状況が表される。

（41）では、文覚が都へ行った時の都の状況が表される。

（40）「君の西八条へ出でさせ給ひしかば、やがて追捕の官人参って、御内の人々搦め取り、御謀反の次第を尋ねて、うしなひはて候ひぬ。（221 僧都死去 3①）

（ご主人様が西八条へおでかけになりましたら、すぐ召し捕りの役人が参って、御内の人々を逮捕し、御謀叛のいきさつを尋問して、殺してしまいました。（同頁訳））

（41）都へのぼりたりければ、凡そとぶ鳥も祈りおとす程のやいばの験者とぞきこえし。380 文覚荒行 5①）

（都へ上った時は、およそ飛ぶ鳥も祈祷によって落すほどすごい験者という評判であった。（同頁訳））

このように、「へ」が条件句と帰結句が時間的な前後関係を示すのに対し、「に」では条件句と帰結句が原因と結果を示す。この場合についても、これまでの「へ」と「に」の違いとして捉えた完了と未実現との違いに繋がる用例と捉えられる。事態の完了がなく、事態の経過を示す場合には「へ」が選択される傾向にある。原因として示される事態は既存の完了した事態を対象とするため、存在を示す「に」が表現に適合するものとして選択される傾向にあると考える。

（５）各用例の分類の基準としたのは、『日本文法大辞典』に説明された意味用法である。以下、『日本文法大辞典』に記述された意味用法の一部を以下に示す。

係助詞「も」:「類例を暗示する（p.836）。」「「類例を列挙する（同頁）。」

助動詞「ごとし」:「一つの事柄が他の事柄に類似したり、同等であると見なされる意を表わす（p.241）。」

副助詞「など」:「一、二のことをあげ、他にも類似するものがあることを示す。」「だいたいのことをいい、それ以外のものを推測させる。」（pp.595-596）。

係助詞「か」:「基本的には疑問の意味を表わす（p.83）が「疑問が強まると反語となる（同頁）。」

係助詞「は」:体言や体言に格助詞・副助詞のついたもの、副詞などを受け、「その語と述語用言との結びつき（厳密にいうならば陳述）を強める」（pp.666-667）

「いかで」「などか」：テキストの訳によって「反語」として分類する。

資料１

〈調査資料における移動動詞〉

万葉集　　:行く・入る・越える・上る・ます・います

竹取物語　:行く・入る・・往ぬ・上る・寄る・参る・罷る

伊勢物語　:行く・往ぬ・立つ・参る・罷る

土佐日記　：行く・返る・退(しりぞ)く・上る・渡る

大和物語　：行く・往ぬ・下る・上る　参る

平中物語　：行く・入る・出でる・往ぬ・罷る・詣でる・罷出でる

蜻蛉日記　：行く・出でる・返る・上る・渡る・参る・詣でる

落窪物語　：行く・渡る　参る

枕草子　　：上がる・行く・出でる・入る・下る・上る　参る・詣でる

和泉式部日記　：入る・渡る

源氏物語　　:行く・出でる・往ぬ・来る・返る・上る・渡る・参る・罷る

紫式部日記　：渡る

堤中納言物語：行く・入る・往ぬ・参る・罷る

更級日記　:入る・移ろう・来る・渡る

大鏡　　:行く・下る・下りる・上る・渡る・参る・罷る

方丈記　　：去る

今昔物語集　:行く・入る・出でる・往ぬ・去る・返る・来る・下る・越える・退く
過ぎる　逃げる・上る・這う・走る・寄る・渡る・至る・参る・罷る

宇治拾遺物語　:行く・入る・出でる・往ぬ・返る・来る・下る・越える・逃げる
上る・去る・走る・寄る・渡る　参る・罷る

十訓抄　　:行く・出でる・入る・移る・赴く・返る・下る・通う・来る・向かう・
上る・渡る・至る　参る・罷る・詣でる

徒然草　　:行く・入る・出でる・赴く・返る・上る・参る・罷る

建礼門院右京大夫　：行く・出でる・下る・上る・渡る・参る・罷る

東関紀行　　：赴く・返る・下る・向う・参る

十六夜日記　　：入る・下る・参る

とはずがたり　　:行く・入る・出でる・移ろう・訪れる・返る・着く・向かう・上る
来たる・下る　参る・罷る

保元物語　　：行く・入る・出でる・至る・赴く・落ちる・返る・駆ける・下る
上る・向かう・渡る・参る

平治物語　　：行く・入る・出でる・赴く・返る・下る・来たる・退く・通る・着く
通る・上る・回る・参る

虎明本狂言集　:行く・入る・失せる・往ぬ・出でる・歩く・返る・来る・下る
落ちる・転ぶ・入る（ハイル）・戻る・行く・飛ぶ・通る・出る（デル）
退く（ノク）・逃げる・下がる・回る・寄る・渡る・参る

天草版平家物語　:上がる・行く・出でる・出る・入る・落ちる・赴く・返る・通う
下る・来る・越す・越える・沈む・進む・通る・上る・着く・回る
向かう・寄る・渡る・参る
＊「向かう」は移動を表す用例のみとする。

資料２

高野本『平家物語』における「へ」と「に」の分類の内訳を以下に示す。

参考表　　高野本平家物語における移動表現における「へ」と「に」分類別用例数

表現型式(内容)			「へ」					「に」				
			単独形	敬語	複合形	漢語	合計	単独形	敬語	複合形	漢語	合計
否定	助動詞	ズ	9	3			12	3				3
推量	助動詞	ジ	1				42					5
		マジ		1								
		ム	10	1	4			2				
		ムズ	2	1				1				
		ベシ	5	2	3	3		1				
		ラム	1	5								
		ケム	2		1			1				
願望	助動詞	タシ	1	1			9					
	助詞	バヤ	5		2							
仮定	助詞	未然形＋バ	3	1			4					
疑問	名詞句	イヅク･イヅチ	9		4		17	1				1
		イズレノー	1									
		ドノー	1									
	助詞	カ	2									
伝聞	助動詞	ナリ	2				2					
命令	動詞	命令形	8	2	2		12					
完了	助動詞	ヌ	19	2	2		64	13		1		21
		タリ	17	14	8	1		5	2			
		リ		1								
過去	助動詞	キ	12	1		1	112	8				13
		ケリ	61	21	16			2	1	2		
―	無標	終止形	50	6	42	12	326	25	1	2	1	201
		連用形	28	12	47			23	2	16	1	
		助詞	48	28	28	1		72	17	32	3	
		名詞	14		10			6				
合計			311	102	169	18	600	163	23	53	5	244

おわりに

以上、本論文では、中世期における助詞「へ」の用法拡張について述べてきた。第１部においては上接名詞句が人物を示す用法を、第２部においては移動動詞と共起する「に」との関係を取り上げた。これまでに述べたことを以下に示す。

第１部では、中世期における「へ」の上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への拡張過程と、その過程における「へ」の特徴的用法について述べた。

第１章では、平安期における「へ」は，上接名詞句として漠然とした方所を示すものとされるものであるが、このような方所の場合には、方所内に存在する受手への隔たりは当然として捉えることができるため、用法拡大においては「甲地点から乙地点へ進み近づく」要素との繋がりを考えた。その後、中世期には「へ」の上接名詞句は「漠然とした〈方所〉」から「〈人物〉〈方所〉いずれにも用いられる語」、そして「個人としての〈人物〉名」という流れを辿ってきた。この変遷過程には、「具体的な使者・隔たり表現があるもの」から「具体的な表現はないが状況により隔たりが判断されるもの」、更には「隔たりの要素が認められないもの（方向性）」への変化という様に、「へ」が意識的制約を次第に少なくして来た過程としても捉えることができる。そして、隔たりの要素が見出せない用例には、上接名詞句〈人物〉が高位であるという共通点が認められた。よって、この用法は「へ」の「方向性」と、上接名詞句〈人物〉に対する優遇的意義の関与の結果ではないかとの考えを示した。

第２章では、第１章で述べたことをうけ、「へ」の上接名詞句における場所を示す語から人物を示す語に至るまでの過程と、その特徴的用法について述べた。

「へ」の用例を通史的に見ていくと、上接名詞句が場所を示す語から人物を示す語への拡張には場所から人物への段階ごとの過程が見て取れる。その過程において「へ」の上接名詞句　が場所を示す語から人物を示す語への過程には、建造物を示す語、そして人物を示す語に建造物を接続した名詞句の存在が確認される。これは「に」は始めから人物を指す名詞句を受ける用法が確立していたのに対し、「へ」では場所名詞から人名詞へと拡張される過程をもつ。そのつなぎの部分に、建造物を示す名詞によって間接的に人を表わす建造物接続形が介在したものと考えられる。この建造物接続形というのは、主に人物を示す名詞的形態素に建造物を指し示す形態素を接続した名詞句である。その場合

おわりに

には、人物を示すものと場所や建造物を示すものとのいずれの概念を含むものであるのか明確に区分することができない。それゆえに建造物接続形が人物を示す語として用いられたものは間接的な婉曲表現と結びつきやすいものであったのではないかという考えを示した。

第３章では、第２章で述べたことをうけ、平家物語諸本における読み本系と語り本系の古本系諸本を対象として、その通史的変化と諸本相互の相違点について述べた。

調査により、読み本系と語り本系の古本系諸本において、上接名詞句における「へ」の特徴と「へ」と「に」の違いが諸本を通して認められるという結果を得た。これまで章句の違いが指摘されてきた諸本において、同時代の諸本においては、時代の変化に応じた用法を以って表されていたことを指摘した。

第２部では移動表現における助詞「へ」の用法変化と、「に」との関係について述べた。

第４章では高野本『平家物語』の「へ」に確認された表現形式を中心として、「へ」と「に」について調査を行った。その調査の結果により、以下の考えを示した。

鎌倉時代、高野本『平家物語』における移動動詞と共起する「へ」と「に」には、表現の確定性や間接性と深く関わる機能的差異が認められる。特に、「へ」は未実現の事態や間接的な否定、推量的な方向性を表す際に用いられる傾向が強く、確定的な存在を表す際に用いられる「に」とは異なる。この違いは「へ」の方向性と「に」の帰着点に繋がるものとして捉えた。このように考えるならば、院政期以降においても、方向と帰着点との違いを有していたのではないかとの考えを示した。

以上、本論文では、「へ」の上接名詞句と共起する動詞の問題について論じてきた。本論文では、これまで注目されなかった院政期以降の上接名詞句と、共起する動詞における変遷過程と、その過程における「に」と異なる「へ」の特性の一端を示し得たものと考える。

このような結果が得られた背景には、先行研究とコーパスという大規模のデータベースによるところが大きくある。現代日本語の研究には、英語や韓国語などの日本語以外の言語との比較により、日本語の特質が明らかにされている。この現代語において認められている日本語の特性は、通史研究においてもなお認め得るものであるかを調査することは、日本語本来の特質をより明らかにすることに繋がるのではないかと考える。

おわりに

これらの先行研究による成果を踏まえつつ、研究の歩みを進めて行くことを希望するものである。

既発表論文との関係

第１部

第１章【研究発表】「格助詞「へ」と「に」の消長についての一考察　－『平家物語』を中心としてー」1991 年 5 月 26 日　国語学会　　発表要旨『国語学』166

【論文】「〈人物〉を受ける「へ」について」1997 年『語文研究』第 84 号、pp.39-56，九州大学国語国文学会

第２章【研究発表】「助詞「へ」の受ける語についての一考察－場所から人物への拡張－」2021 年 10 月 30 日　日本語学会

【論文】「助詞「へ」の上接名詞句についての一考察－場所から人物への拡張－」2022 年『待兼山論叢』第 56 号、pp.19–37、大阪大学文学会

第３章【研究発表】「平家物語諸本における助詞「へ」の用法」―発話動詞に係る「へ」と「に」の用例を中心としてー」2023 年 1 月 7 日　大阪大学国語国文学会

【論文】「平家物語諸本における助詞「へ」の用法－発話動詞に係る「へ」と「に」の用例を中心としてー」第 120 輯、pp.64（1）－50（15）、大阪大学国語国文学会

第２部

第１章　　書き下ろし

＊本稿への収録に際し、いずれも加筆修正を行った。

［参考資料］

第１章

国立国語研究所（2025）『日本語歴史コーパス』バージョン 2025.3https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/

（平安時代編−仮名文学）更級日記　（室町時代編）天草版平家物語　虎明本狂言集／（室町時代編 - 狂言集）虎明本狂言集

『大蔵虎明能狂言集　翻刻註解』（上巻・下巻）（2006）　編　大塚光信

『宇治拾遺物語』校注・訳　小林保治・増古和子 (2017) 新編日本古典文学全集、小学館

『和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』校注・訳　藤岡忠美　中野幸一　犬養廉　石井文夫　(2014) 新編日本古典文学全集、小学館

『平家物語』（上・下）(1985・1986)　校注・高木一之介・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦日本古典文学大系　岩波書店

『天草版平家物語対照本文及び総索引』（1986）本文篇　著・江口正弘　明治書院

『天草版伊曾保物語』（1964）著・井上章　風間書房

『延慶本平家物語本文篇上・下』（1990）編・北原保雄　小川栄一　勉誠社

『ロドリゲス日本大文典』（1974）原著・Ｊロドリゲス　訳注・土井忠生　三省堂

第２章

国立国語研究所 (2022) 『日本語歴史コーパス』バージョン 2022.3
https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/

『新編日本古典文学全集和泉式部日記　紫式部日記　更級日記　讃岐典侍日記』校注・訳　藤岡忠美　中野幸一　犬養廉　石井文夫　(2014)　小学館

『新編日本古典文学全集宇治拾遺物語』校注・訳　小林保治・増古和子　(2017)　小学館

『新編日本古典文学全集落窪物語　堤中納言物語』校注・訳　三谷栄一・三谷邦明・稲賀敬二　(2017)　小学館

『歌経標式　影印と注釈』著・沖森卓也・佐藤信・平沢竜介・八嶋泉　(2008) おうふう

『新編日本古典文学全集建礼門院右京大夫集　とはずがたり』校注・訳　久保田淳　(2008)　小学館

『日本古典文学大系古事記　祝詞』校注・倉野憲司・武田祐吉　(1984)　岩波書店

『日本古典文学大系日本書紀下』校注・坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋　(1984)、岩波書店

『新編日本古典文学全集竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』校注・訳　片桐洋一・福井貞助・高橋正治・清水好子　(2017)　小学館

『新編日本古典文学全集土佐日記　蜻蛉日記』校注・訳　菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久　(2015)、小学館

『天草版平家物語対照本文及び総索引』著・江口正弘　明治書院

『平家物語』上・下　校注・高木一之介・小澤正夫・渥美かをる・金田一春彦　(1985・1986) 日本古典文学大系　岩波書店
『平家物語全註釈』上～下 2　冨倉徳次郎　(1987・1986・1986・1986) 角川書店
『平家物語総索引』編・金田一春彦・清水功・近藤政美　(1973) 学習研究社
『新編日本古典文学全集萬葉集』1～4　校注・訳　小島憲之・木下正俊・東野治之 (2006・2016・2016・2015)　小学館

第３章

引用平家物語諸本　〔渥美（1962）対照表の掲出順による〕

『内閣文庫源平闘諍録』（1980）編著・早川厚一　弓削繁　山下宏明　和泉書院
『源平闘諍録上・下』（1999～2000）註釈・福田豊彦　服部幸造　講談社
『四部合戦状本平家物語一～三』（1967）解題校訂・松本隆信　慶応義塾大学付属研究所斯道文庫　大安
『訓読四部合戦状平家物語』（1995）編・高山利弘　有精堂
『南都本・南都異本平家物語上・下』（1971）解題・松本隆信　汲古書院
「南都本平家物語〔翻刻〕」（1978～1980）高橋伸幸　『札幌大学教養部・短大部紀要』12～17 号　札幌大学
『大東急記念文庫蔵延慶本平家物語一～三』（1964）古典研究会
『延慶本平家物語本文篇上・下』（1990）編・北原保雄　小川栄一　勉誠社
『伊藤家蔵長門本平家物語』（1977）編・石田拓也　汲古書院
『長門本平家物語一～四』（2006）編・麻原美子　小井土守敏　佐藤智広　勉誠社
『源平盛衰記』（1975）藝林舎
『屋代本平家物語』（1978）貴重古典籍叢刊 9　角川書店
『屋代本高野本対照平家物語一～三』（1990）編・麻原美子　春田宣　松尾葦江　新典社
『平松家旧蔵本平家物語』（1965）山内潤三　木村晟　古典刊行会　（付・「平松家旧蔵本平家について」著・山内潤三　木村晟）
『平家物語竹柏園本上・下』（1968）天理図書館善本叢書編集委員会　八木書店
『鎌倉本平家物語』（2006）解題・山岸徳平　山内潤三　汲古書院
『平家物語百二十句本一～五』（1968～1969）編・吉田幸一　解説・山下宏明　古典文庫（原本　国立国会図書館蔵本　百二十句本）
『新潮日本古典集成平家物語上・中・下』（1990）校注・水原一　新潮社　（底本　国立国会図書館蔵本　百二十句本）
『日本古典文学大系平家物語上・下』（1985～1986）校注・高木市之助　小澤正夫　渥美かをる　金田一春彦　岩波書店　（底本　龍谷大学図書館本　覚一本）
『日本古典対照分類語彙表』宮島達夫・鈴木泰・石井久雄・安部清哉（編）附録 CD (2014) 笠原書院

第４章

国立国語研究所（2025）『日本語歴史コーパス』バージョン 2025.3https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/
（平安時代編−仮名文学）竹取物語　伊勢物語　土佐日記　大和物語　平中物語　蜻蛉日記　落窪物語　枕草子　源氏物語　和泉式部日記　紫式部日記　堤中納言物語　更級日記　大鏡　讃岐典侍日記／（鎌倉時代編−説話・随筆）方丈記　宇治拾遺物語　十訓抄　徒然草／（鎌倉時代編－日記・紀行）海道記　建礼門院右京大夫集　東関紀行　十六夜日記　とはずがたり／（鎌倉時代編−説話・随筆）今昔物語集／（鎌倉時代編−軍記）保元物語　平治物語　平家物語／（室町時代編 - 狂言集）虎明本狂言集　（助詞「に」）　（室町時代編 - キリシタン）　天草版平家物語

国立国語研究所（2024）『日本語歴史コーパス』バージョン 2024.3
https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/　（奈良時代編−万葉集）　（室町時代編）虎明本狂言集（助詞「へ」）

『あゆひ抄』（1977）解説　中田祝夫　勉誠社文庫 16

『新編日本古典文学全集　土佐日記　蜻蛉日記』（2015）校注・訳者　菊池靖彦　木村正中　伊牟田経久　小学館

『新編日本古典文学全集　平家物語 1・2』（2014・2015）校注　訳　市古貞次（底本　東京大学国語研究所蔵本　高野本、覚一別本）小学館

『新編日本古典文学全集　竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（2017）校注・訳者　片桐洋一　福井貞助　高橋正治　清水好子　小学館

『新編日本古典文学全集　源氏物語　①②⑤⑥』（2006）（2016）（2015）（2015）校注・訳者　阿部秋生　秋山虔　今井源衛　鈴木日出男　小学館

『新編日本古典文学全集　土佐日記　蜻蛉日記』（2015）校注・訳者　菊地靖彦　木村正中　伊牟田経久　小学館

『中世日記紀行集』（2013）校注・訳者　長崎健　外村南都子　岩佐美代子　稲田利徳　伊藤敬　小学館

『平家物語大事典』（2010）編　大津雄一　日下力　佐伯真一　櫻井陽子　東京書籍

『日本語文法事典』（2022）編　日本語文法学会大修館書店

『日本語文法大辞典』（2001）編　山口明穂　秋本守英　明治書院

『日本文法大辞典』（1991）編　松村明（明治書院）十三版

『日本古典対照分類語彙表』（2014）編　宮島達夫　鈴木泰　石井久雄　安部清哉

［参考文献］

青木伶子（1956）「「へ」と「に」の消長」『国語学』24 日本語学会、pp.107-120

赤塚紀子　塚本篤朗（1998）『日英語比較選書 3 モダリティと発話行為』中右実編　研究社

安達隆一（1985）「天草版平家物語」の表現－助詞「に」「へ」の用法－」『神戸外大論叢』

神戸市外国語大学、pp.23－37
渥美かをる（1962）『平家物語の基礎的研究』三省堂
石垣謙二（1955）『助詞の歴史的研究』岩波書店
井上章（1968）『天草版伊曾保物語の研究』風間書房
今泉忠義（1950）『国語学概論』有精堂
江口正弘（2003）「『天草版平家物語』の「へ」と「に」について」『語意の解釈がゆれる中古語と中世語の考察』、笠間書院 pp.236－252
大久保恵子 (2018) 『路女の日記における敬称の使い方－「殿」を中心に–』近代語研究第二十集、pp.301-319、武蔵野書院
奥村彰悟（1999）「江戸語における「へ」格・「に」格―『浮世風呂』の登場人物別使用傾向―」『筑波日本語研究』4　pp.140－128、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室
此島正年（1956）『国語助詞の研究』桜楓社
小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
小林隆（1992）「「へ」の消長についての方言学的一考察」『日本語学』11　明治書院、pp.142-161
五島和代 (1990) 「源氏物語の「殿」と「君」」『北九州大学文学部紀要』42、pp.21-45、北九州大学文学部
白井純 (1997) 「キリシタン文献における「に」格と「へ」格－待遇表現の標識について－」『国語国文研究』106、pp.50-6、北海道大学国語国文学会
杉井鈴子（1954）助詞「へ」の成立『国語学』19、pp.42－54、国語学会　武蔵野書院
田窪行則（1984）「現代日本語の「場所」を表す名詞類について」『日本語・日本文化』12号　大阪外国語大学、pp. 89－115
鼈岡昭夫（1979）「近代口語文章における「へ」と「に」の地域差―「行く」と「来る」について―」『中田紀夫功績記念国語学論集』国語学論集刊行会　勉誠社
鼈岡昭夫（1979）「助詞「へ」と「に」との使い分けの一考察―漱石『坊ちゃん』と鴎外『雁』とを比較して―」『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』pp.729－741、馬淵和夫博士退官記念国語学論集刊行会　大修館書店
鶴田洋子（2009）「平家物語の引用について」『立教大学日本語研究』16、立教大学日本語研究会、pp.45-55
寺村秀夫 (1992) 「動的事象の描写」『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』pp.87-138、くろしお出版
寺村秀夫 (1992) 「『ところ』の意味と機能」『寺村秀夫論文集Ⅰ』pp.321 -336、くろしお出版
冨倉徳次郎（1987）『平家物語全注釈　上』角川書店

西田直敏 (1978) 『平家物語の文体論的研究』、明治書院
西田直敏 (1990) 『平家物語の国語学的研究』、和泉書院
藤田保幸（1999）『引用構文の構造』国語学 98、国語学会　武蔵野書院　pp. 1 －15
森野宗明（1971）「古代の敬語II」、編　辻村敏樹『講座国語史　第 5 巻　敬語史』　大修館書店　pp.165-180
森雄一（1995）「助詞「へ」の歴史についての認知論的考察」『築島裕博士古希記念国語学論集』pp.291－310、築島裕博士古希記念会　汲古書院
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』　武蔵野書院
山田孝雄（1954）『日本文法学概論』宝文館　初版（1934）
山田孝雄（1967）『平家物語の語法下』　宝文館